

神の山  
槍夏峰

(1988年初登頂の記録)

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



神の山  
格聂峰

HAJ格聂(ゲニ)峰遠征隊  
登山報告書

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



序にかえて

# 解 決 し た 課 題

隊長 飛岡 和夫

南達のキャンプ・サイトで、流木が激しく、時には弱々しく燃える炎を、何人かで囲んでいる。誰もが言葉少なく、何かを考えている様子だ。登山終了後は、山頂を毎日のようにガスの中に隠している格闘とも、明日は別れなければならないからだろうか。2年間、心の中で対峙してきた隊員もいたのだ。雨足が激しくなって来た。早々に大型テントに入り、シュラフにもぐり込む。C2のアタック前には意外にも冷静だった心は、今夜は均衡を崩しているようだ。

未踏だった格闘は、1986年の偵察隊（山森欣一隊長）によって東面の写真がもたらされ、'87年に私の娘も含めた13名の隊構成によって東南稜から未踏の頂を目指したが、結果は5,300mで断念、連日の悪天によるものとはいえ、完全な失敗に終わった。計画段階での私の転職・多忙・軟弱さもあり、基本的行動が揺れ動いた一時期があり、強烈なほどまでに心の葛藤を強いられてしまった。さらに、自分の今後のいきざまのスタートとして、絶対に踏まなければならない課題を残してしまった。帰路、再度の許可の内諾を得た。

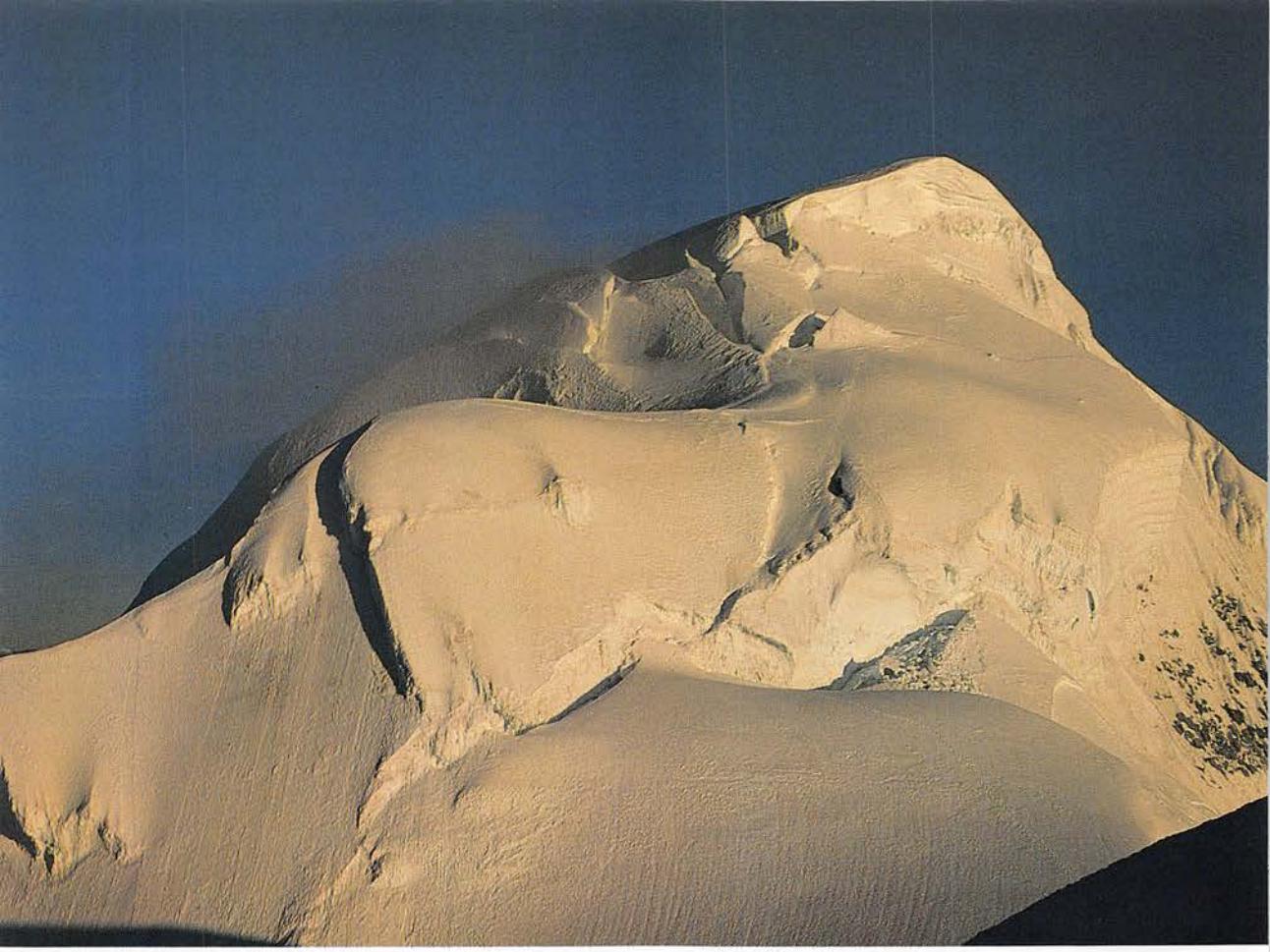
今回は、昨年のメンバーが3名いる。私と副隊長の伊藤と遠藤さん。さらに4名が加わり7名。今度は絶対におとさなければならない。2度目といった安易なものとほどとおい。高度な計画遂行のため退職し、ワン・ステップとしての格闘であ

り、成功無くして、今秋のGⅡ、冬期K2とてあろうはずが無い。伊藤と、今後のヒマラヤ高所登山のステップであり、以後の計画を含め退職しての参加だ。遠藤隊員は丁度50歳で、天城隊員は2つ目の未踏峰を、寺沢隊員は4度目では非ピークに。滝田、大野は初見参だが何としても。

種々、貧欲なまでの欲望は、順調な計画の遂行と高所順応行動、我々の行動中のみ好天をもたらしてくれた“神の山”に支えられ、初登頂に成功し、7名全員が6,204mの頂にそっと立たせもらった。7名全員の総力を結集し、“神の山”的ほえみと、幸運にも恵まれ成功し、残してしまった課題を解決することが出来た。

解決とともに格闘から去り、次のスタートが始まるが、格闘と別れなければならない事が小さな心の均衡を崩しているようだ。それ程までに、心を注ぎ込んだ格闘だった。2年間、20名の“格闘”登山は終了した。

格闘峰。元来、無器用な私は国内山行で得意なジャンルがあるわけもなく、オールランドな山行を行い、ヒマラヤ高所登山も同様に5~6,000m峰から8,000mの巨峰といったオールランドな山行を展開している。その展開だからこそ、登山本来の素晴らしさを私達に与えてくれた格闘に、微力ながらもすべての力を注ぎ込める登山が出来た山・格闘峰に感謝せずにはいられない。



モルゲンロートに輝く格聂峰

全員登頂成る



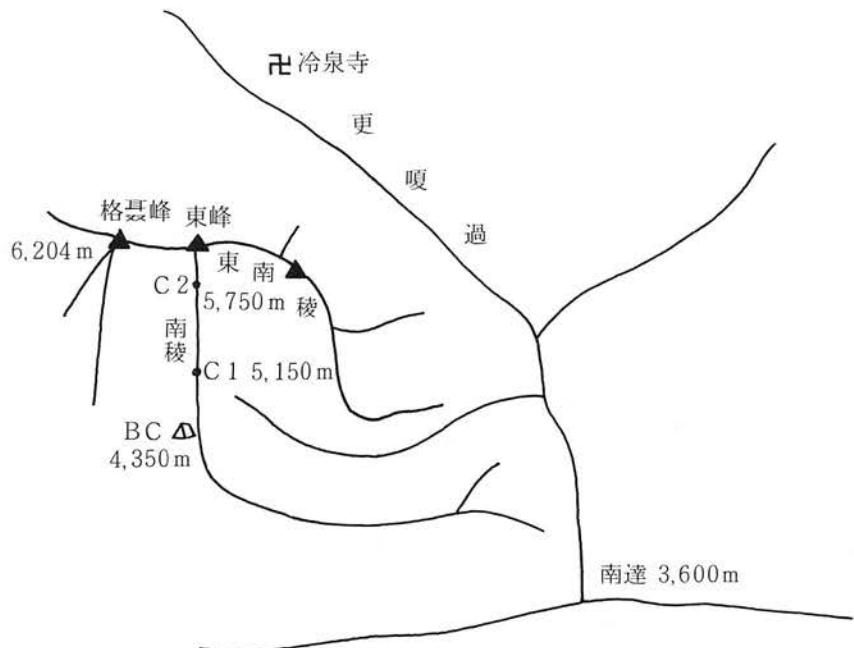


ベースキャンプからの格観。主峰は見えない



西方遙かに一群の高峰が。ナムチャ・バルワではないかと思われたが……

## ルート概念図



## 目 次

隊員構成、周辺図	6
I 行 動 記 錄	7
往路キャラバン（大野邦晴）	8
登山活動（飛田和夫）	10
帰路キャラバン（滝田 収）	17
第1次隊登頂記（伊藤哲朗）	20
第2次隊登頂記（寺沢玲子）	21
II 隊員紹介と紀行	23
プロフィル	24
50歳の登頂（遠藤京子）	26
遠征を終えて（天城敏彦）	28
振り返って（寺沢玲子）	29
初めてづくしの格聂峰遠征（滝田 収）	30
神の山 格聂峰（大野邦晴）	30
戦勝格聂（高 敏）	31
勝利而帰（包啓東）	33
III 担当報告、特別レポート	35
食 料（寺沢玲子）	36
装 備（滝田 収）	37
気 象（遠藤京子）	39
基礎体温測定のススメ（寺沢玲子）	40
準備活動記録	42
御協力者名簿	43

題字、大橋蒼馨 カット、与儀勝美

隊員構成 (年齢は遠征時)

隊長 飛田和夫 1946年1月生 (42歳)  
東京都府中市

食料 寺沢玲子 1951年8月生 (36歳)  
埼玉県越谷市

例 NNP 同人バイネニアソブ

わらじの仲間

副隊長 伊藤哲朗 1956年10月生 (31歳)  
東京都世田谷

装備 滝田 収 1957年3月生 (31歳)  
福島県郡山市

同人バイネニアソブ

郡山ケミカル㈱ こまくさ山岳会

医療 遠藤京子 1938年5月生 (50歳)  
気象 東京都大田区

食料 大野邦晴 1961年12月生 (26歳)  
東京都板橋区

京都山岳会

八重洲無線㈱ 東京心岳会

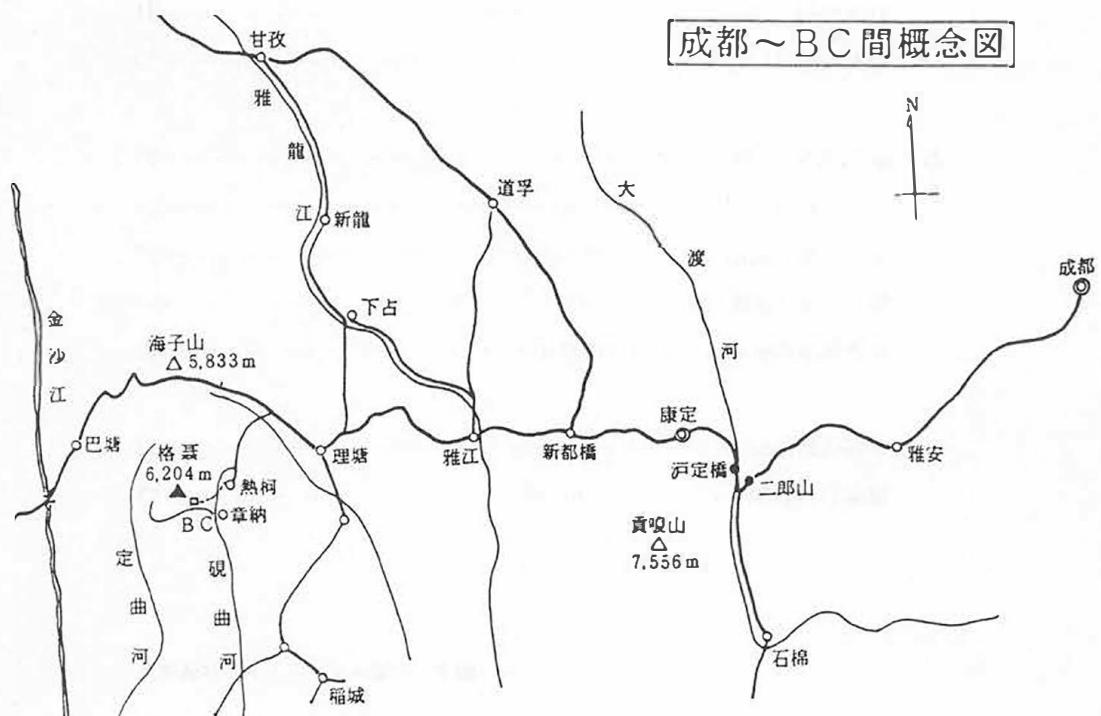
梱包 天城敏彦 1947年5月生 (41歳)  
東京都新宿区

連絡官 高 敏 (24歳) 四川省登山協会

懶有斐閣 同人バイネニアソブ

通訳 包 啓東 (36歳) 工業技術院

コック 劉 悟堅 (40歳) 四川省体育委員会



# I 行動記録

往路キャラバン

登山活動

帰路キャラバン

第1次隊登頂記

第2次隊登頂記



山頂直下の雪壁を攀る

# 往路キャラバン

大野 邦晴

5月20日 東京 晴、北京 雨

H A J (5:20) → 箱崎 (5:50~6:45) → 成田空港北ウイング (7:50~10:20) → 北京空港 (14:00~24:00) → 成都空港 (2:20) → 錦江飯店 (3:20)

前日、尻にガンマーグロブリンの注射したところが痛む。A型肝炎予防とのこと。始めての海外であるが、前日3:00までH A Jで飲んでいたのと、諸々の疲労によりかなり眠い。

17:00頃北京空港を発ち成都へはもうとっくに着いているはずなのに何故か未だに北京空港のロビーで悶々としている。いったいいつになれば成都へ行けることやら……。

21:33、北京空港ロビーにて

5月21日 成都 曇り

隊荷整理及び買出し。

成都の道路は自転車で一杯だ。その間をすり抜けるように車が走っている。信号機はあってもなくても同じような感じだ。日本の道路事情と全く違うのにおどろいた。

夜、暗くなつてからホテル前を散歩。人また人、車また車すごい!!

5月22日 成都 曇り

錦江飯店 (9:50) → 新津 (10:40) → 雅安 (昼食) (13:00~14:00) → 新沟 (夕食) (17:00~20:00) → 康定 (24:00)

一方通行規制の為、新沟で約3時間の足止め、新沟の村を見て歩く。途中、二郎山の通過は周りが暗く何も見えず、ただ寒いだけ。

5月23日 康定 晴

康定 (10:08) → 折多山 (11:20~11:40) → 新都橋 (12:30~13:40) → 雅江 (16:00)

途中、ミニヤコンカの衛星峰を望む。小さいながらも氷河あり。

雅江到着後、雅江県体育局へ挨拶に。その後、

また、会食。歌あり踊りありで大変に盛り上がる。

5月24日 雅江 晴、理塘 晴

雅江 (8:30) → 理塘 (12:30)

成都から朝晴れていても午後には雲がでてくるという同じような天気のパターンが続いている。

雅江を過ぎる頃から4,000m前後の高度のキャラバンとなる。ヤクも多くなる。雅江は、チベット人と漢人が半分ずつ位だったが、ここ理塘は殆どがチベット人だ。

いよいよ高度障害がでてきた。昼食後3時間余りも昼寝をする。その後、脈拍を計ると90／1分、体温は36.2°C、10歩歩いただけで息切れがする。頭が痛い。食欲は全く無く、夕食は食べられず、茶だけをガバガバ飲む。明日は多分、気分も良くなることだろう。

5月25日 理塘 曇り、熱柯 曇り時々雨

理塘 (8:05) → 热柯 (12:30)

途中の峠より初めて格聂峰の一部を望む、上部は雲の中。去年よりも雪が少ないとのこと。

熱柯に到着し、昼食前に近くの川で食器洗い。

昼食後、何もする事が無いので本を読んだり、音楽を聴いて過ごす。

近くの川で天城さんが魚を釣って来た。若干小さめ、夕食のおかずとなる。



ビリヤードに興じる少年

明日は、4,000mの峠まで高度順化トレーニングの予定。

招待所前で村の子供達とバスケットボールをして遊ぶ。富士山の頂上と同じ位の高度ではさすがにしんどいが、理塘にいたときより体がいうことをきいてくれるので安心した。

### 5月26日 热柯 曇り時々雨

热柯 (8:20) → 4,000m 峠 (9:40~10:00)  
→热柯 (10:50)

高度順化トレーニングで4,000mの峠へ散歩。格聂峰は上部が雲にかくれていて見ることができず、また、峠は雨が降っている。

村で唯一の病院を見学、村に関する諸々の話を聞いた。

出生 約20人／1年

人口 約3,800人

医療費 幹部、保健制度による

人民、有料

出産費 1987年以前は無料、以降1人3元

平均寿命 約60~70歳（ガン、脳溢血が死因の上位）

平均結婚年齢 男…23~30歳

女…16~17歳

天城さんは今日も釣り。昨日の魚より大きい。

### 5月27日 热柯 曇り時々雨

热柯 (9:05) → 4,220m 地点 (11:00~11:



清流に沿ってひっそりとある热柯の集落

05) → 4,550m 地点 (12:00~12:15) →热柯 (13:43)

9:00までにヤクが来なかった為、昨日より高い地点まで高度順化トレーニングを行う。

行動中はずっと雨、時々アラレ混じりで激しく降ったが、我々が热柯へ着いた頃より天気は回復し、夕方には3日間のうちで最高の天気になる。天気は回復の傾向にあるようだ。

### 5月28日 热柯 雨、南達 曇り後晴

热柯 (8:40) →格則 (11:40~12:20) →乃干多 (13:55) →南達 (16:00)

17:00頃より初めて格聂峰の全容を望むことができた!!

### 5月29日 南達 曇り後晴

南達 (8:55) →B C 予定地 (4,350m) (12:00~13:30) →南達 (15:10)

朝、ガスがかかり曇り空だったが、しだいに晴間が広がってきた。格聂峰南稜の枝尾根より格聂峰を間近に望む。初めて見る冰河に感激。南稜下部は岩峰が連なり、かなりきびしそうだ。明日はいよいよB C設営だ!!

### 5月30日 南達 曇り

南達 (10:10) →B C (4,350m) (12:55)

今日はBC開き。H A J旗を立て、ケルンを積み安全祈願。これから20日間、がんばらなければ……。



大高原を下ると突然理塘の街が現れる

# 登山活動

飛田 和夫

未踏の格聂峰に立つには。昨年は東南稜にルートを求め、悪天候に阻まれもして、約5,300mで断念した。可能性のあるもう一方のルート、南稜については、昨年のBC位置からでは下部が池塘、ブッシュ、ガラ場である等の理由から断念していたが、南稜を末端からつめれば可能性がある事については何となく希望があった。東南稜については中間部の困難さと、ギャップが問題であった。

今年はルートを南稜にすべく計画を進めていった。最終的には、BC手前の南達から偵察行動を行い、決定する事についていた。

5月29日に飛田、伊藤で南稜末端から南稜偵察、天城、寺沢、滝田、大野で南稜をおおきく西側へ回り込み、西側の偵察。が、前者により南稜からの可能性をみいだす。一日の日程も無駄に出来ないので、後者による偵察を中止させ、4,350mのBC予定地付近の水場の様子等について調査してもらい、前者はさらに4,720mまで達し、さらに南稜からの可能性を高める。翌、30日は南達から降雪の中、南稜にBCを設営。安全祈願を行った後に登山活動の打合せと、チーム構成を発表する。

A隊（L）飛田、伊藤、滝田

B隊（L）天城、寺沢、大野

フリー 遠藤（実際には、全日程をB隊と一緒に行動となる）

5月31日 A隊 ルート工作

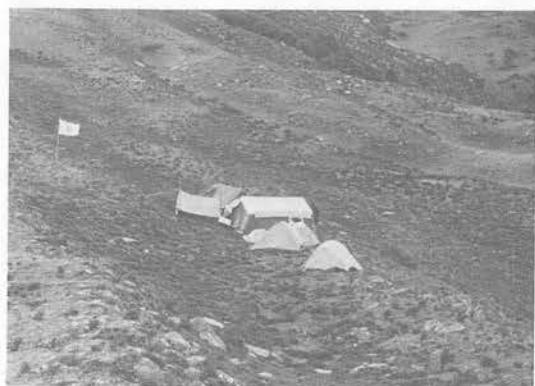
（晴） B隊 BC整理

昨日までの不安定だった天気も、今朝的一面のガスによって終わりをつげ快晴になり、格聂の山容を完全に望む事が出来た。右手のギャップをもったラインが東南稜。左手の岩稜から上部に至って雪稜となっているのが、今回ルートとする南稜。東南稜と南稜の合う付近の最高部に三角形のスノーピークがわずかに望める。ピークの下部から、左、右の稜線の中間に氷河が落ちている。末端は4,700m付近、その下はガラ場、ブッシュ帶でおおきな沢を形成し、BCの下を東方に流れている。

流れの端に昨年はBC（4,250m）を設けた。

BCから草原状の丘陵を登る。初め西方に向かい、途中から右手におおきくカーブしつつ高度を獲得していく。草原、水場、ガラ場を登るにつれ、南側の山並が次第に遠くまで望めてくる。途中、4,740m付近に運動靴をデボし、新雪の中を真新しい登山靴に履きかえて登る。ガラ場を右上すると、左手は南稜の末端岩稜から岩稜が連なり、頂部から右手にも岩峰・岩稜が連なっており、我々が達した位置は丁度、カールの末端付近になるのだろうか、カールはあたかも野外音楽場のようでもある。

南稜に上るには、左手の岩稜上の最低コルに上るルート。最奥少し左手の真白なルンゼからスノーリッジに達するルート。そして、右手の岩峰を完全に回込むルートの3本が考えられる。岩峰を回込むためのルートとして岩峰と氷河のコンタクトライン沿いのルートになると思われる所も所々望める。岩峰を回込んでルートが確保されれば、ピークへ最短距離になることから、伊藤副隊長と検討し、まず、岩峰を回込むルートにラインを引くことにする。ヒザ位までのラッセルを行い、一度、右手岩稜のコルに達しようとするが、再度、ガラ場と雪に足を取られながらトラバースをして岩峰の基部に入りこむルンゼに入る。岩稜はどこを見渡しても、今にも崩れそうな岩ばかりで形成



草原上のBC

されていそうな感じだ。高度も5,000mは越し、急なルンゼに入ると行動も鈍くなる。滝田は、すでに自己最高高度となっている。岩峰の下はテントが張れそうだが、さらに右手の一段上までスタカットで行く。雪面の安定した台地で、左手の岩峰からの落石の心配もなさそうであり、また、展望も良くC1とする。

最高高度を体験している滝田に1日の高度差をあまり多くさせないために、C1の整理をしてもらい、伊藤と上部のルート工作に向かう。昨年とは全く違った天気、青空の下での登山活動は実に素晴らしい。暑くてまいりそうにもなるが、1本、1本とロープを固定する。氷河上にルートをとり、クレバスをさけながら、結局持参した7本を張り終える。BCがわずかに望める。ルートは、もう1~2本ロープがあればより確実に分かる地点だったが、行ける、という自信を持つ事が出来た。

B隊と遠藤さん達によって、BCの隊員用、緊急用として雇用している馬方のテントも増え、メステントの中なども整理され、BCとしての機能が整っていた。20時頃より30~40分程、強風が荒狂う。

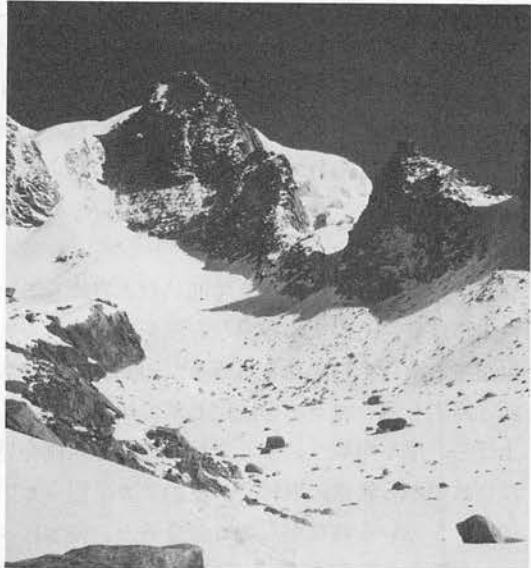
隊員7名、中国側5名（連絡官、通訳、コック、馬方2名）と馬2頭の生活が始まり、疲労による不調を訴える隊員もいるが、たいしたこと無く、回復した天候と共に、順調な登山活動がスタートした。

6月1日 A隊 BC~C1~BC  
(晴) B隊 BC~C1~BC

今日は、7名全員による荷上げだが、B隊と遠藤さんは、高所順応を主目的に行動。今日も快晴の中。昨夜の強風もありC1はブロックを高々と積み、完璧なサイトを全員で作り上げる。全員が5,150mのC1まで達し、夕方にはBCに戻り、順調なスタートとなる。

夕方、再度ミーティングを行い、明日から約1週間程の行動計画を発表する。

6月2日 A隊 BC休養  
(晴) B隊 BC~C1~BC  
A隊はBC休養で種々BC整理。B隊はC1へ



C1手前のカール。中央に見えるルンゼを登るとC1に着く

の荷上げを行い、帰路、ガレ場等を主体にケルンを積み、赤布をつけ、ルートの整備をする。

6月3日 A隊 BC~C1~ルート工作~C1  
(晴) B隊 BC休養

今朝は、寺沢、大野が5時に起床し朝食の準備をしてくれる。朝は7時頃より明るくなりだし、夜の21時過ぎまで明るいので、つい寝不足になってしまいそうだ。

B隊の人達に見送られてBCを出発する。個装のほかに、あれやこれやでザックも重くなる。まして1日休養後の行動開始時は体は重い。休養日は2日間とれば良いのだろうが、やはり日程の都合もあるので、そもそもいかない。

C1下のカール状の雪面も午前中は一応安定しているので、BCから3時間弱で上って来れる。順応した体なのでさらに行きもスムーズになる。C1で昼食をし、休憩の後に、ルート工作に向かう。5月31日の最高到達点からさらに傾斜のあまりない氷河上を右に左へと伸ばす。途中、前方でドスッという音がする。何と左手の岩峰からの落石。岩峰は垂直の岩壁を形成しているが、所々に融水が流れ落ち、さらに今にも落ちそうな岩屑も見える。上部に望める岩壁とその右手のセラック帯の中間のルンゼを目指してロープを伸ばすが、前

方のクレバス帯を1つ1つ越すことが出来るたびにホッと胸をなでおろす。左手からの落石に気を配りつつルンゼを登る。上部に行くと大きな雪の窪地があり不安ながらも通過していたが、後日、全体に雪が融けて少なくなると、下から大きな岩が出てきた。落石の跡が窪地になっていた様子である。

ルンゼを登り切り、左手に回込むと岩峰をまいだ事になり、そのまま容易な岩壁を登って行くと短距離で南稜上に達せられそうだ。30m程急な雪面と露岩を登りロープを固定して、伊藤、滝田を上げる。早く南稜へ、早く南稜の様子と西側を見たい欲望から岩壁に取付く。途中2カ所程シビアな登攀を強いられながら40m強登ると、完全にルートが断たれてしまう。ハーケンも残り1枚の他何も無し、1m程登れば右手にホールドが何カ所かあるが届かない。伊藤に上って来てもらい、その1m位の完全にホールドが無い部分を飛田の肩に乗ってルートを伸ばす。残り1~2P程と見えたがハーケンは0となってしまう。また、ルートが確保出来ても荷上げルートとしては不向きな事もあり、このルートは断念する。BCにいるB隊に南稜上に上れるかも知れないと交信したことでもダメとなり、17時30分に下降をはじめC1に戻った。明日は南稜側壁と氷河のコンタクトとを辿る事にする。約5,350mまで達する。夜、雪が降る。

#### 6月4日 A隊 C1~ルート工作~C1 (小雪~曇) B隊 BC~C1~BC

小雪の中をC1より出発。昨日の最高到達地点の1P下まで約1時間、雪面をトラバースする。時間が早い為か、意外に雪はクラストしていてアイゼンが利く。3Pでトラバースを終えるが、左上部からの落石が気味悪い。降雪と同時に雪が落ち、一緒に落石を伴っている様子。したがって大きな雪崩は無いだろうが、下部はクレバスが口を開けている。

岩壁に2本のハーケンでピンを取れば気分的にも楽になる。さらに岩稜の突起を左に回込み、急な雪面を右上する。すでに高度も5,350mを越し、伊藤も1歩1歩が自分の最高高度で、滝田も同じ



5,150mのC1。強風に備えてブロックを積んだ

様に苦しそうだ。ルートとなる雪面は所々にヒドンクレバス等があるので、すべてロープを固定する。

安定した平坦地から下部を望む。昨日登った岩壁を登っても1~2Pでは南稜に達せそうもないし、また、トラバースした上部は岩稜側壁が切立ち、その上部は緩傾斜になっていて雪が付いている。緩傾斜でバランスを崩した雪が、途中の岩屑を誘発し、魔のトラバースになっている。

平坦地から真横に走るクレバスもスノーリッジ沿に通過出来、急雪面を2P登る。曇空で暑くなく行動しやすいが、時々発生する濃いガスによって、時々ルートの確認が出来ず足を止められる。

すでに南稜も左手に手が届きそうで、BCから望める南稜のスノーリッジになる付近。安易に南稜に登るのを止めて、そのまま雪面を辿って行くと、今度こそ完全にクレバスによってルートを断たれてしまう。大きな段差をもつバームクーヘン状の雪壁は手前のクレバス帶によって断切られ、右手からも通過不可能。左手の雪壁よりルートを拓く以外にはなさそうだ。フィックス・ロープの手持ちが無くなつたので、雪壁は明日にして下降する。BCからも時々我々の行動が見える様子で、通訳の包氏の声も元気が良い。

19時の定時交信によると、B隊は全員順調。打合せの通り種々の行動に対応出来るとの事。明日

からの行動を指示する。A隊は1~2日中に東峰と主峰を望みたいし、明日はC2の位置を決定したいので、B隊はA隊の行動に合わせるようにC1への移動とする。6日はC2へ荷上を行い、7日はBCへ下降。フィックス・ロープも残り少ない。上部はどうなのか、東峰～主峰間のギャップは、主峰はどうか。すでにBCにあるロープ類はすべて上がっている。最悪の時を考え、下部で張替えて使用出来ればと考え、梱包用のP・Pを200m程、明日荷上げしてもらう。

A隊は3名共、C1帰幕し休憩後に頭痛。意外に早い高度獲得のためでもあるのだろうか。

6月5日 A隊 C1～ルート工作～C2決定～  
(曇) C1

B隊 BC～C1

10時に前日の最高到達点に達し、左手の雪壁に取付くが、壁の下の軟雪の下がシュルンドになっていて取付けない。他を探すが結局1P半程下降し、クレバスをスノーブリッジにより渡り、露岩の稜の右手の雪壁にルートを取る。2P目は傾斜を増しグサグサの雪、胸まで没する様な雪に意気も消沈しがちだが、あとわずかで南稜に達し、反対側が望め、さらに上部が判ると思うと、全身に力も甦る。11時45分に稜線にスノーバーを埋込みロープを固定し、伊藤、滝田に声をかける。

南稜は、南西側の我々の登ってきた方に急傾斜で落ち、西側は対称でなく緩傾斜が続く。だがその先は完全に切立っている。緩傾斜側が気持良くアイゼンが利きそうだ。すぐ上部のスノーピークで稜線は望めないが、スノーピークの左手に主峰らしきピークが目にはいる。複雑そうな雪稜がピークから伸び、下部の岩稜へと続いている。その稜線と南稜の中間に右手と同じ様に氷河が横たわっている。南稜下部は左・右共に切れた岩稜が続いている。初期に岩峰をまかずに他の2本のルートから南稜に上がってたら、さらに時間を費やしていたようだ。

ピッケル、バイルを手にし、クレバスにも落石にも心配することなく稜線上にルートを伸ばす。6P伸ばすと平坦地となりC2(5,750m)とする。意外と近くに東峰、ギャップの先に主峰がどっしり

りと望める位置だ。所々に時間を費やしそうな所も見えるが、登れるという確信を持つ。

B隊はC1直下のルートの整備をしつつC1に移動、全員が2張りのC1に集結し、ワイワイ、ガヤガヤと楽しい時間を過ごす。

明日の行動は、A隊の飛田、伊藤は早朝出発し、C2から上部のルート工作を行い、チャンスがあれば主峰へ、滝田は無理をせずBCへ下降、B隊はC2への荷上げをしてC1へ。時間がある時はBCへ下降。

6月6日 A隊 C1～C2～C1～BC  
(小雪) B隊 C1～稜線～C1～BC

3時頃からの小雪が降り続いている。まだまだ暗い5時20分に出発。C1上部の平坦地4～5Pが意外に軟雪で足をとられ時間をくってしまう。C2予定地には8時20分頃に到着するが、濃霧は一向に消えず、時折吹雪ともなる。今日、無理をしそうな私達の計画に“格闘の神”は、そっと注意をあたえてくれている。昨日中にルートは頭の中に入っていたが、上部への行動は無理と判断し下降をする。

B隊の方は、軟雪、トラバース帶付近で意外と時間がかかっている様子。トラバース帶上部の安定した台地で合流する。現在の悪天、時間、また、今後の日程を考え、荷上品は途中にデボさせ、次のステップのアタックに対応してもらうために、稜線まで登り高度を稼ぎ、体験してもらう事にする。



C1～C2間、魔のトラバース

A・B隊共にC1で休憩をし、夕方全員がBCに集まった。緑のあるBCは、気分をなごませてくれる。久し振りに飲む缶ビール、ウィスキー、白酒は美味だ。

#### 6月7日 全員休養

頭を洗い体をふき、サッパリとした気分の後、16時よりミーティングを行い、アタック計画を発表する。

第1次隊(L) 飛田、伊藤、滝田

第2次隊(L) 天城、寺沢、大野、遠藤

9日 1次 BC～C1

2次 BC休養

10日 1次 C1～C2

2次 BC～C1

11日 1次 C2～ルート工作～C2

2次 C1～C2～C1

12日 1次 C2～ピーク～C2

(飛田・C2泊、伊藤、滝田・C1  
泊)

2次 C1～C2

13日 1次 飛田、2次隊のサポート

伊藤、C1～C2(荷下げ)～C1

滝田、C1～BC

2次 C2～ピーク～C1

14日 全員BCへ下降(滝田はC1へ荷下げに  
来る)

#### 6月8日 全員休養

連日、午後気温が高くなると、いずこから來るのかアブの大軍にうんざりする。山頂付近は一日中ガスの中。

#### 6月9日 A隊 BC～C1

(晴) B隊 BC

昼食の寿しを食べ、14時頃より見送られてBCを出発する。途中、アラレにあったりもするが日射しの強いC1に入る。入山時に比べるとかなり積雪が減り、露岩、クレバスがかなり顔を出してきている。

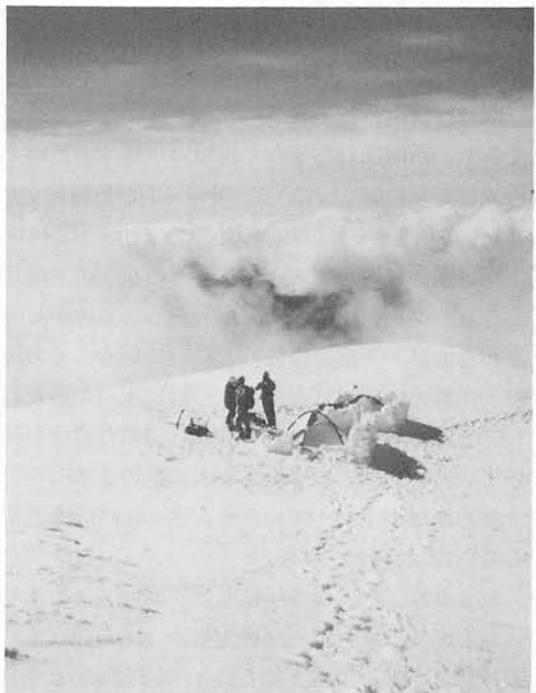
#### 6月10日 A隊 C1～C2～ルート工作～C2

(晴) B隊 BC～C1

晴天のC1を出発。C1上部の平坦地のクレバスも多くなり、初めのルンゼは右手のアイスフォールが崩れた様子で、フィックスは宙に浮き、スノーバーは完全に抜けている。トラバース帯は、雪崩と落石の跡がかなり見られ、また、融雪の為かフィックスがかなり高い位置になっていたり、スノーバーが抜け、とんでもない所に見えたりしている。整備をし、さらに、前回のデボ品の回収行ったためC2着は昼頃になってしまふ。

空腹を満たし、休憩をしてから、ルート工作に向かう。残り少ないロープ類と、多目のハーケン類をザックにつめC2を出る。天気も良く展望は素晴らしい。複雑そうに見えた最初の部分も弱点はあった。その先はC2で望めた通り南面側をロープを固定する事なく登れる。コンテニアנסで1歩1歩と高みを目指し、BCから最奥に望めた三角形のピークを目指す。右手には、昨年のルートとしていた東南稜が、スッパリと両側を切落し、そして、ギャップを作り、右手のスノーピークへと続いている。

三角形のピーク手前は予想通りクレバスで通過出来ない。右手は東壁を形成し、一気に落ちてい



巨大な雪底上のC2

る。右手からまこうとも思うが、簡単に谷底へ引きずり込まれそうだ。登りながらも見えていたが、南稜側に下降して行くとスノーブリッジの様なのが1P程クレバス沿いに怪しげにかかっている。ルートはそれしか無いので、伊藤に確実なビレーを依頼し、体を移動させていくと、意外にもしっかりしている。非常にラッキーだ。1P固定し、堅雪にアイゼンを利かせ東峰を回込んで行くと主峰の全容が望める。約50~60m程一旦下降し、主峰の山頂部に取付く事になる。下部は雪壁にルートがとれるのか、とれない場合は? 上部の入組んだアイスフォール? が目に入る。ルートになりそうな所を目で追う。山頂部への取付付近がポイントの様だ。いずれにせよ、どこからでも登るほかない。それにしてもギャップは50~60mで何の障害も無さそうなのには安堵の気持でいっぱいだ。18時にC2に戻る。

19時の定時交信で、A隊は明日アタックをするので、B隊はC2へ移動する様に伝える。ピークは確実に踏めるだろうとの自信はあるものの、アタック前夜は、気分が高まるが意外と冷静に過ごすことが出来た。

6月11日 A隊 C2～ピーク～C2、C1  
(晴) B隊 C1～C2

6時10分、ヘッドランプの明りで出発する。前日の最高到達地点に7時40分、主峰山頂部の取付下には7時55分に到着する。近くに来るとさらに弱点はあった。雪壁の右手に1本の凹角状が走っている。凹角状に入る手前の足元が不安定そうだが、ゼルブストにガチャ類を種々付け、いつもの様に飛田が取付く。グサグサのザラメ状の雪に不安定な足元は時々、腰付近まで没し、ヒヤッとさせられるが、ダマシダマン、いやらしい部分を通過する。さらに1P強、稜を登ると傾斜は落ちる。左手のセラック帯がルートとなるのかと思っていたが右手のスロープにルートがとれそう。その上部右手にピークがある。スロープを斜上して、最後のわずかな雪壁を越すと山頂稜線に達せられそうだ。今回は最後まで“格闘の神”は私達に幸運をもたらしてくれているかのようだ。

最後の急雪面から、雪壁を慎重に登り、小さな

雪庇をピッケルで切り取ると西側から冷たい風が顔を打つ。山頂稜線に出て、堅雪にガッチリとスノーバーを埋め、大声でどなる。「登っていいぞ……」。もうすぐ山頂と知る伊藤、滝田の顔がそれぞれ稜線に出てくる。疲労よりも、もうすぐ未踏のピークに立てるといった緊張と喜びが入り混った顔付きだ。雪壁の途中からBCと2次隊に交信を入れる。2次隊はトラバース帶付近でかなり苦労しているようだ。

10時38分、3人が揃って未踏の格闘、6,204mに立った。格闘のほんの回り以外は雲海でおおわれていたが、何よりも、2年目にして成功しピークに立った喜びはおおきい。BCの包氏も興奮気味な声を届けてくれる。

約30分程で山頂を後にする。C2には13時頃戻る。途中から山々はガスに包まれている。14時頃より2次隊が順次C2に入って来る。昨日、1次隊が入った時よりも、トラバース帶付近の状態は悪くなっている、フィックスも何カ所か切られていたとの事。天城、寺沢、大野、そして50歳になる遠藤さんもガスの中から現れてC2に入って来る。1次隊の伊藤、滝田がC1に下降する前に全員で記念写真。伊藤、滝田はC1に下降し、翌日、滝田はBCへ下降、伊藤はC2へ荷下げに上がって来る。飛田はB隊のサポートの為、C2にもう1泊。

6月12日 B隊 C2～ピーク～C2～C1～BC  
(晴) C(飛田同じ)  
伊藤 C1～C2～C1～BC



雪壁を登り切って山頂稜線へ

## 滝田 C 1～B C

飛田、遠藤、天城、大野、寺沢のオーダーで6時15分出発。今日は、何としても、50歳の遠藤さん、今まで3回遠征でピークに立てなかった寺沢、初見参の大野、未踏峰2つ目になる天城、それぞれにはどうしてもピークを踏んでもらいたい。1・2次隊共に、ピークに立つために苦労してきた事が実を結ばなくてはいけない。

順調な行動と、昨日より安定したルートにより9時5分には全員がピークに立った。西方遠くには、世界最高の未踏峰ナムチャ・バルワと'86年に自分自身でも考えられない事を体験しつつ、隊として成功したギャラ・ペリも望めた。何よりも、格聂の頂に立った2次隊の面々が素晴らしい顔をしていた。

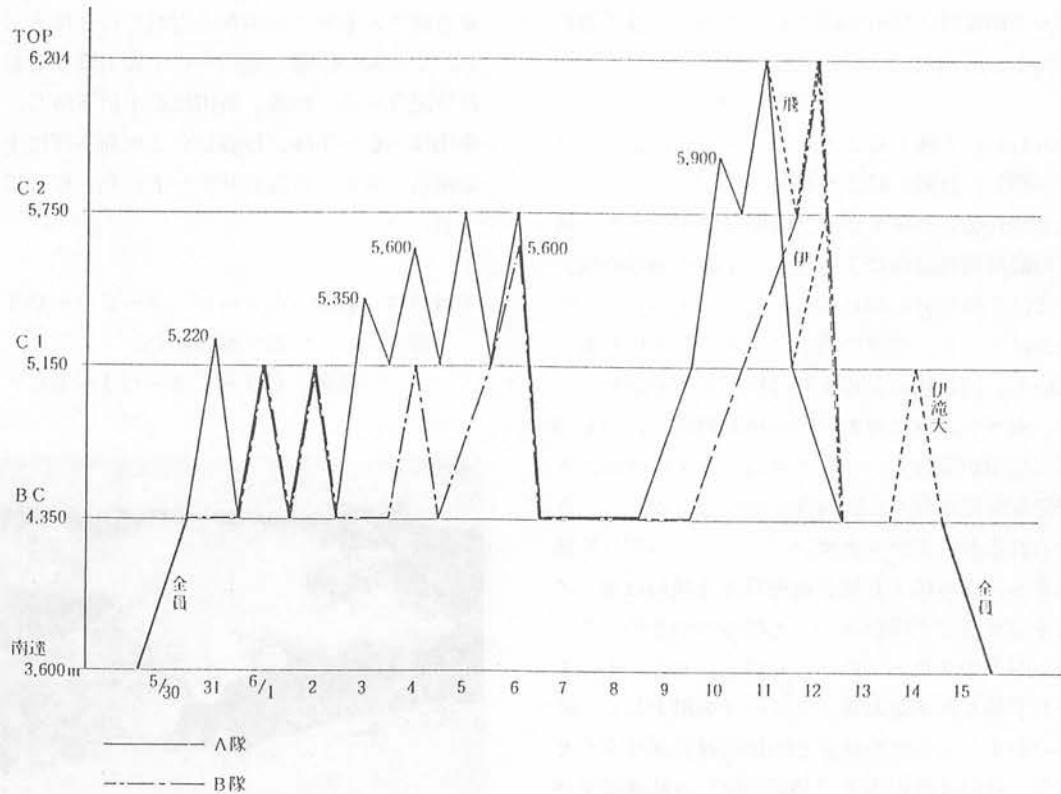
C 2に戻ると、C 2の荷下げのためにC 1から伊藤が上ってきておりC 2を撤収して下降する。

ルート上の雪庇の崩壊の跡、広がるクレバス、新たなるクレバス、宙に浮くスノーバー、落石のすさまじい跡や雪崩の跡を見ると、丁度、今回の登山時期も終了にきていると、身心共に感ぜずにはいられなかった。さらにB Cに下った滝田からの連絡によると、C 1直下は積雪も少なく滝と化しているとの事。再度フィックス・ロープを1本持ち下降する。1本固定するが両側の岩質はすぐにでも落石となってきそうで脅威さえ覚える。中間部付近は完全に水流が現れ滝が露出してきている。

最後の最後まで緊張から解放されなかつた“神の山・格聂”もB Cに到着すればほぼ90%が終了した。残る10%はC 1の撤収だが、14日に伊藤、滝田、大野で撤収した。

2年越しの格聂も、今回は7名全員の初登頂で終了した。B Cに帰幕後の“白酒”に酔わない訳がなかった。中国側の人達も共に嬉んでくれた。

行 動 表



# 帰路キャラバン

滝田 収

6月15日 晴

B C出発（9：40）～南達（12：00）

今日は南達に下る日、全員登頂の成果を持っての下山であるが、長い登山活動に皆、けっこう疲れた表情である。今日も晴天、B C最後の格聂峰もくっきりとその姿を現し、我々を見送ってくれているようだ。テントの撤収、梱包とあわただしい時間が過ぎる。ヤクと馬に梱包品を積み込み、出發！

再び来ることはないだろうが、格聂峰よ本当にありがとう。B C入りの時よりずっと花が増えた草原が続く、夏のような暑い日差しを浴びての下山に思ったより時間がかかり、南達に着いた時には皆、疲れきった表情である。

テントの設営、隊荷の整理等の後、遅い昼食後やっとひと息つく。その後は思い思いに体を洗ったり、洗濯したりと自由な時間を過ごす。天城は元気に近くの川に今晚のおかずを釣りに行く。

南達から望む格聂峰は入山した時とはうって変わり、その全容を望ませてくれているが、地肌を大部上部まで現している。その姿は、どこかしらはじらいを見せているようだ。

今日より5日間じっくり体調を整えて帰路のキャラバンにそなえたい。

6月16日 晴

南達での1日目。遠藤、大野は格聂の西面を調査に出発。天城、伊藤、それに私の3人は南達の西方より流れる川で釣りを楽しむ。隊長は体調がもうひとつすぐれずテントキーパー、寺沢も食糧の整理等でテントにいる。

釣りの成果は16匹の大漁、昼飯のおかずとなる。夕方、羊の肉と白酒が手に入る。さっそくたき火を囲んでのバーベキュー・パーティーとなる。

6月17日 曇り時々晴

はたして今日は何曜日なのだろう。長いこと山に入っているとそんなことはどうでもいい感じに

なる。しかし今日の南達はまさに日曜日、皆、思い思いに起き出し、朝飯を食い、また芋虫と化する者、花や蝶の撮影や採集に動き回る者等々、気ままな日曜日である。コックの劉さんが作ってくれる遅い昼飯を食べ終わるとようやく行動開始。

それぞれ西に北に、はたまた川へと、3～4時間間隔を減らしに行く。

6月18日 曇り時々晴

南達（7：50）→冷泉寺（10：20～11：10）→最北点（11：50～12：15）→お寺（13：00～13：50）→南達（15：40）

朝、テントの外に出てまず眺めるのはやはり格聂峰である。しかし今日もガスに包まれその姿を閉ざしたままである。

今日は遠藤、天城、滝田、大野と通訳の包さんの5人で格聂峰の北にあるお寺の見学と奥にある針峰群の調査に行く。このお寺は文化大革命で壊され2年前に建て直されたばかりとか、ちょうど登頂した時に格聂の直下に望むことができた。

格聂峰はあいにく上部がガスに隠れ、下部の岩壁帯だけしか見えない。それでも4,200～4,300m付近以上には氷河が見られ、南面とは違う北側の地形をかいだ見ることができた。東峰に突き上げていると思われる雪稜を見ることができ、こちらからこのルートも案外行けそうに思われたがどうだろうか。

川の前方にそびえる針峰群を見たかったが、時間切れでそこまで行けず、残念。

隊長、副隊長、寺沢は休養。

6月19日 雨時々曇り

夜、咳込みがひどく、今日は私はテントキーパー、隊長、寺沢は昨日私たちの行ったお寺を見に行く、他の隊員は釣りに余念がなく今日も川に向かう。

夜の食事は盛大に盛り上がったものの私は体調がいまいちすぐれず早めに就寝。

## 6月20日 晴時々雨

今日は誰も予定はないようである。9:30頃朝食をとり、メステントで大人7人がゴロゴロ、遅い昼食後再びゴロゴロ、昼寝の後、明日の熱柯への出発準備、一段落後何人かが今晚のおかずを釣りに行く。ここでは川釣りの習慣はないのだろう。どんなエサでも喜んで魚が飛びついてくる。まさしく入れ喰い。誰でも釣れる。ストックに釣糸と仕掛けをつけただけで魚がかかっているのだから。

夜は魚料理が食卓を賑わしてくれた。食事後明日の出発準備。

## 6月21日 雨時々曇り

南達（8:20）→乃千多（10:05）→格則（11:50～12:20）→熱柯（15:00）

皆の離れがたい想いを映してか、別れの南達はあいにくの雨である。そして格聂峰もまた姿をかくしたままである。帰りのキャラバンも花ざかりの街道。複雑な気持ちで自然足も止りがちである。乃千多の部落を過ぎる頃より時に青空ものぞくものの、神の山はその姿を見せてくれない。

帰りは格則の露天風呂に是非みんなで入ろうと言っていたが、あいにくそれが出来ずじまいになる。最後の登りでひと汗かくと熱柯である。

熱柯に到着と同時に迎えのジープの到来、ここで2泊の予定が中国側の事情で明日理塘に向けて出発することになる。盛大なる晩さんとなり、熱柯の夜はふけ、あとは芋虫と化す。

## 6月22日 曇り

熱柯（13:30）→理塘（17:40）

午後からのゆっくりの出発である。午前中個装をまとめ、梱包を行い、昼食後村人全員？の見送りを受け出発。途中の峠で最後の格聂峰の勇姿を仰ぐ。ここより望む格聂峰はあくまで白く高い。あの頂に登ったのかと思うと感慨もひとしおだ。

ジープの振動が眠りをさそう。行きにはあまり見られなかったチベット人の遊牧が、今はあちこちでテントが見られ、暖い時期を迎えたことを告げている。車は山道から川藏公路に抜ける。行きかう車の量も増え、我々のジープのアクセルも次第に軽くなる。



熱柯にて

理塘の温泉にも入りそこない、街をぶらつくだけになる。伊藤、天城、包、劉は街の映画館へ。

## 6月23日 晴

理塘（8:20）→雅江（12:00）→新都橋（14:05～16:40）→康定（18:30）

今日のドライブは長い。天気は昨日とうって変わり晴天である。朝日を浴びて高原をひた走るジープ、車は快調に進み、雅江手前で休憩、ここまでは2台のジープと1台のトラックは順調に来たのであるが、先頭を行く我々の車が雅江を過ぎて30分しても後続がない。さらに先の新都橋で2時間半ほど待っても来ない「おかしい、車の故障か、雅江で停められたか」、憶測がかけめぐる。運転手の聞くところでは車の事故で道路が渋滞し動けないとのこと、これでは待っていてもいつになるかわからないと、我々の車は先に康定へ向かう。

康定の招待所で一息ついた20時頃、後続のジープが到着、事故とちょっとしたトラブルで遅くなったとか、御苦労様。遅い夕食後、思いもかけないことに近くに温泉があるというので全員大よろこびで入りに行く。1月ぶりの風呂である。

この温泉の建物はなかなかrippaな物で、まさしく龍宮城を感じさせる。風呂の温度により料金が違うのもユニークだ。

#### 6月24日 晴

康定（15：00）→泸定橋（17：30）

午前中、遠藤、寺沢はバスで再度温泉へ。男どもは招待所でゴロ寝をしたり、町に散歩をいたり。昼、康定の体育委員会が登頂成功的祝賀会を開いて下さり、美味しい料理をたっぷりとごちそうになり、満腹の状態で泸定へ出発。うとうとしているうちに着。暑い。招待所で、熱柯で燥かしきれなかったメスティントを干す。泸定橋は、かの長征の時の有名な戦跡であり、記念公園もある。

しかし登頂を終えて2週間近くなるが、こんなにノンビリした旅行者気分でいると、本当に格聂峰に登ったのだろうかと疑問にさえなってくる。

#### 6月25日 雨のち晴

泸定橋（8：15）→二郎山→雅安（15：00）

朝起きると雨。今日は少し過ごしやすいかと思うが、やがて青空が見えて気温は上がる。今日も暑そうだ。車に乗るとまたまぶたが重くなる。疲れからくるものかもしれないが起きているのはタバコをすう時と昼食の時ぐらい。結局、二郎山もいねむりのまま通りすぎる。新沟で昼食。またねむる。眠っていてもじわじわと汗ばんでくる。やがて雅安。大きな町で、今日は招待所でなくホテル泊り。国際電話もかけられるようだ。

#### 6月26日 雨のち曇り

雅安（8：30）→成都（13：00）

雅安の朝も雨である。ここ四川省も梅雨入りなのだろうか。格聂峰には新雪が降っているのだろうか。そうだとすれば、我々は絶好の時期に登山できたことになる。

今日はついに成都入り。早いものだ。ついこの間成都を出たばかりのようにも思える。でも、行きは田起こして黒々としていた田圃は、今は緑のじゅうたんだ。成都に近づくにつれ、車も人も多くなり、時おり渋滞にまきこまれる。

成都では、まっさきに登山協会の方々から祝福

をうける。デボ品の整理の後錦江飯店へ。風呂に入るなどしてひと息つく。

#### 6月27日 曇り時々晴

午前中成都観光、遠藤、天城はホテルで休養。まず、土甫堂、次に蜀織工場、最後に武侯祠と、まさにかけ足観光、陳マーボーで昼食。午後は、前登山協会副主席の鄭先生を訪ね、後は買物など。18：30より、お世話になった四川省登山協会の方々を招いて答礼会。昨年お世話になった胡さん、朱さんもかけつけて下さる。にぎやかで楽しく、ちょっとさびしい酒宴となる。

#### 6月28日 晴

錦江飯店（6：30）→成都空港（7：30～8：00）→北京空港（11：00～11：40）→北緯飯店（12：15）

ついに成都ともお別れだ。今度この地を訪れるのはいつの日か、是非また来たい。長い間寝食と共にしてくれた、高さん包さん劉さんありがとうございます。高さんは我々の食事を作ってくれたり食器を洗ってくれたり、こまめに動いてくれました。包さんは時にユーモラスな通訳をして我々をころげまわらせててくれました。劉さんは本場の四川料理を味を変え品を変え、おいしく食べさせてくれました。本当にありがとうございました。また四川省登山協会のみなさま、大変お世話になりました。

北京に向かう飛行機の窓からは、白く輝くミニヤコンカが見える。北京空港では、中国登山協会の出迎えを受け、北緯飯店へ。ホテルで一息ついで、今夜は中国登山協会の祝賀会。この席で隊長以下全員に登頂証明書が手渡される。味わい深いと同時にずっしりと重みを感じる。まして初めての海外遠征でこれを手にすることことができた私としては、その重みを、ことさらありがたく受けとる。

#### 6月29日 曇り

北京観光で、万里の長城と明の十三陵を見学。午後は買物など、隊長、天城、大野は明日、帰国。遠藤は北京に4日まで滞在予定。伊藤、寺沢と私は明日からウルムチへの旅で7月10日帰国予定。隊は一応ここで解散となる。

# 第1次隊登頂記

伊藤 哲朗

1988年6月11日満天の星空の下、飛田隊長、滝田隊員、それに私の3名はC2を出発した。

ヘッドランプをともしながら、一歩一步体調をたしかめながら登って行く。3人ともまずまずのようだ。天気も良いし、このぶんならなんとか頂上にとどくかもしない。

昨日のトレールをたどり最初のクレバスを慎重に通過すると、広い雪の斜面に昨日立てた竹竿が東峰手前のクレバスの弱点へ向って続いている。

このクレバスには、昨日のルート工作で9mmPPロープ1本をフィックスしていたが、主峰の登りを考え、これを回収し、代りに6mmのナイロンロープをフィックスする。我々の用意したフィックス用ロープは、そのほとんどをC1～C2間で使い切り、今残っているのは、これをふくめ、わずか2本100mたらずである。ここを過ぎるころから、先ほどまで、シルエットだった主峰が、モルゲンロートに染まりはじめた。

東峰からは、コンテニアンスで、慎重に進み、7時40分主峰と東峰のコルに達した。ここまでルートは昨日確認済みであるが、ここから先は未知である。ロープがたりるかどうか心配だ。

休憩の後、雪壁を右上ぎみに1ピッチ登り、緩斜面を重たい雪に苦しみながら、少しづつ高度を上げて行く。ベースキャンプから高く、そして遠くに見えた東峰は、もう足下に見える。

更に進むと、頂稜から落ちる雪壁の下についた。ここまでくると、もう頂上は、すぐ右上に見える。目の前の雪壁もなんとか越せそうだ。ここで我々は登頂を確信した。何分か後には、かならず3人そろって頂上にいるだろう。

9時すぎ最後の雪壁に取りつく。トップに行く飛田隊長は、軟雪に苦しみながらも、確実に高度を上げ、最後の雪庇を切りくずし、今にも頂稜に達しようとしている。ジッヘルする手に力が入る。

思い起こせば、雨と雪に苦められ、ついに東峰すら目にすることなく敗退を余儀なくされた昨年の夏。あの時のくやしさを思いだす。あの時の隊

員の顔を思いだす。頭上にある、白い頂と、青い空を見せてあげたい。徐々に高まって行く興奮を伝えたい。

そして、強風の稜線に出た。ラストの滝田隊員を待ちながら、わずか上部に見える頂上に目をやる。もう大丈夫だ。もう頂上までは、急な雪壁も険悪なクレバスも無い。ただ、傾斜の落ちた意外に広い雪面が数10m残るだけだ。ラストが到着してから、3人揃ってクラストした雪面をゆっくりと登って行った。

10時38分、すべての努力が報われ、2年越しの夢はかなえられた。周りを見渡しても、今、我々の立っている雪のピークより高い所はない。まぎれもなくこの山域の最高峰で格闘主峰の頂だ。

遠く南方には梅里雪山、東方にはミニヤコンカ、また、遙か西方には、ヤル・ツァンボー河の両岸に聳える世界最高の未踏峰のナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリが望めるはずだが、今日は雲の中だ。展望が無いのは残念だが、格闘峰初登頂の喜びを減少させるほどではない。

強風の中、一人一人写真を撮り合い、30分程で白い頂をあとに、慎重に慎重に下降に入った。



## 第2次隊登頂記

寺沢 玲子

6月12日6時15分、サポートに入った飛田を先頭に、ヘッドライトを点してC2を出発する。心地良い寒気にアイゼンを軋ませて、昨日初登頂を成し遂げた1次隊のトレースを辿る。黎明の空の美しさが、今の気持ちを表してくれているようだ。

1次隊のトレースとフィックスロープに助けられ、快調に東峰に着く頃には、夜も明け、主峰はモルゲンロートに輝いていた。その神々しさに、思わず手を合わせている自分に気づき、苦笑してしまう。

東峰と主峰のコルで休憩後、氷柱の垂れ下がった雪壁を右上する。昨日は雪質の悪さと、クレバスに大分苦しめられたらしいが、今日のこの快適さはどうだ。雪質は良く、何よりも既に1次隊の苦労して張ったロープがある。不安定なザラメ雪とヒドンクレバスにすい分苦労した昨日の登攀がまるでウソのようだ、と飛田が言う。その後しばらく緩斜面を登ると、東峰がはるか下に見える。

さらにトレースを辿ると、頂稜から落ちる雪壁となり、乗越すと、広い雪面が目に飛び込む。大野がさわやかな笑顔で、ラストの私を迎えてくれ、全員で横一列に肩を組み、昨日1次隊によって立てられた頂上の証の赤旗を目差して歩く。

9時05分、底抜けに明るい大野の“ヤッター！”の歓声があがる。見渡せば東には雄峰コンガが、遙か西には玉峰ナムチャ・バルワとギャラ・ペリが雄姿を見せていている。昨日の初登頂に続き、我々全隊員が頂上に立つことが出来た。2日連続して頂上に立った疲れているはずの飛田隊長、50歳にしてなお、山への意欲を持ち続けている遠藤隊員、幸運にも四川省の未登峰2座の頂に立った天城隊員、底抜けな明るさを持つ遠征初体験の最年少の大野隊員、そして4度目にして初めて頂上に立つ感激を味わった寺沢。

飛田隊長に促され、標識のそばを掘り始めると、いろいろな想いが一度に押し寄せてきて、不覚にも涙をこぼした。登頂した嬉しさと安堵感、不慮の事故で参加を断念した山崎氏への想い、そして

何よりも、今回の遠征の基礎を築いた事務局山森氏への感謝の念……。

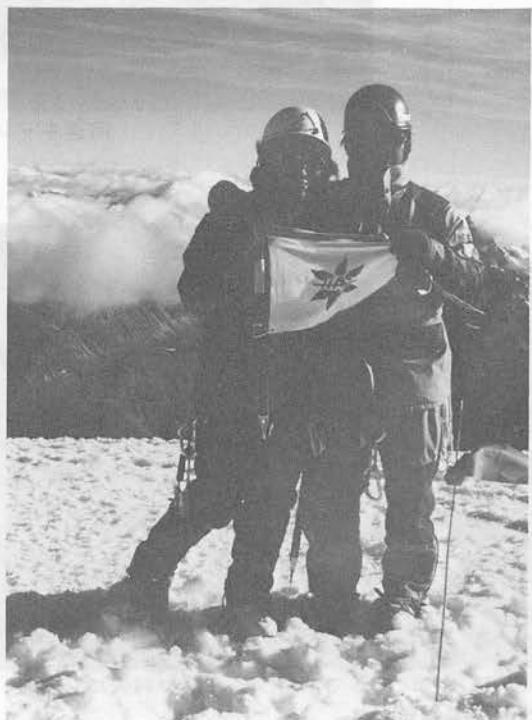
掘り終えた穴に、山に焦がれ、アジアの地に焦がれ続けながらも、若くして逝ってしまった友の遺髪を埋める。“神の山”的頂は、現世を生きていくのにはあまりに清すぎた友の眠る場にはふさわしいかもしれない。

主峰の取付まで下降すると、C2に向かって黒い点が近づいて来るのが確認出来た。昨日の登頂で疲れ切っているはずの伊藤が、荷下げのサポートに登ってきている。何という仲間達なのだろう！

東峰を駆けるように下ると、まぶしい笑顔の伊藤が、祝福の握手で迎えてくれる。小柄な伊藤がひと回りもふた回りも大きく見える。

隊長を初めとする1次隊の協力で、6,204mから1日でBCまで下降する。

全員登頂の喜びと、素晴らしい仲間に支えられたさわやかな登頂であった。





4月16日東方会館での壮行会



乃干多集落の人々。通過する隊員を見に  
大勢集まってきた



南達キャンプサイトの休日



熱柯のはずれにあるマニ塚。信心深い村人は必ず左側を回って通る



4,000mの谷間にひっそりと建つラマ寺  
冷泉寺

## II 隊員プロフィールと紀行

### 隊員プロフィール

50歳の登頂

遠征を終えて

振り返って

初めてづくしの格聂峰遠征

神の山 格聂峰

戦勝格聂

勝利而帰



ベースキャンプ撤収の日。

左から、滝田、伊藤、天城、飛田、遠藤、寺沢、大野



飛田 和夫

『残してしまった課題』解決への執念で、自から常にトップを務め、加えて2次隊のサポートまでかって出る。日頃の温厚さからは想像出来ない過激な一面も……。旧知の羅凡女史に「酔払い隊長」の称号?をいただく。



伊藤 哲朗

隊長同様、課題解決のため職を辞しての昨年に続いての参加。副隊長の重責を担いながらも、ワルガキ振りを發揮するが、根は人一倍やさしい。動物と接しているときの暖かい眼差を、クーニャンにも向けたらと思う。独身。



遠藤 京子

同じく昨年に続いての参加。50歳にしてなお一線で活躍しようとする姿勢と並々ならぬ探求心は立派。山のために始めた中國語は、通訳顔負けであった。思ったこと感じたことをすべて表現できるというえがたい特性のもちぬし。



天城 敏彦

雪宝頂、格聂と四川省での初登頂を2度も体験した万年青年。裸馬をさっそうと乗りこなしたり尺物を次々と釣り上げてきたり、はたまた酒の席では劉氏と2人、アブナゲな写真を撮られたり。国際電話で愛妻の声を聞いた頃より熱を出し始めたのは何故?



寺沢 玲子

長年の登山経験と細やかな心配りで、登山にマネジメントに大活躍。すべての登山活動を終えて荷下げから帰った隊員を迎えるに出了瞬間、ヨナヨナとその場に崩れ落ちたのが印象に残る。でも男たちの無遠慮な話に顔を赤らめてうつむくという歳に似合わぬ純情な面も……。



滝田 収

初の遠征で初登頂を成し遂げた幸福者。出発直前に母上が他界され、悩んだ末の参加だけに、喜びもひとしおであったことだろう。自転車と酒で鍛えた体力で、始終飛田、伊藤と共にルート工作に活躍しテント生活でも実に小まめに動く。独身。



大野 邦晴

酒がなければ動けない、と言う反面、ヨーカンやらカリン糖やら甘い物も大好きという現代っ子。唯一の20代で、一気に平均年齢を37歳まで引き下げた。初めて見るあらゆるものに新鮮な好奇心を示し、目を丸くしていた。独身。



高 敏

四川省登山協会の職員。86年天城隊員と共に雪宝頂に行って いる。今回、24歳の若さで連絡官の大役を果たしてくれた。頭の回転が速く、いつも率先して何か仕事をしている。理性的で いながら、かつ、人なつっこい 現代青年。



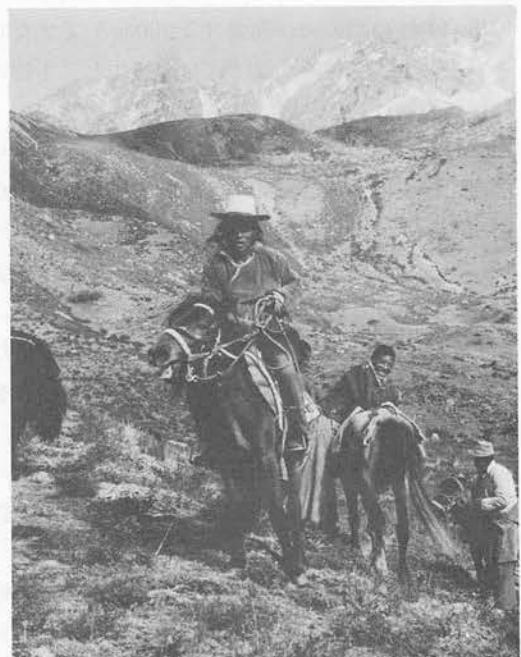
包 啓 東

工業技術院で働くよき父親。 登山隊の通訳は初めてで、慣れない山旅は、重労働であつただろ うが、終始柔軟な態度で接してくれた。「あのねえ」で始まる独特な日本語も、のどかなベ ースキャンプにマッチしていた。



劉 悟 生

四川省体育委員会専属のコッ クさん。酒好きで気のいい、味 のあるオッチャン。乏しい材料 をやりくりして食卓をにぎわせ てくれた。南達で作ってくれた 魚のスープや鶏の内臓とギョウ ジャニンニクのいためものの味 は忘れられない。



馬方たち。カメラを向けたらさっそうと ポーズをキメてくれた。

# 50歳の登頂

遠藤 京子

6月12日、北京夏時間の朝6時、東の空にわずかな夜明けの兆しが見えはじめる頃、ヘッドランプをつけてC2を出た。気温-3°C。やっと硬い雪の上を歩ける朝が来た。今が一年中で一番気温の高い季節で、すでに9日からC1の最低気温は零度まで上がり、朝から軟雪に苦しめられてきたから、今朝のアイゼンのキュッキュッという音は快感である。

飛田隊長が、昨日の第1次アタック成功に続いて、今日も第2次隊を引率して、トップをゆっくりと安定した歩調で登って行く。そのすぐ後を、彼の足が前に移るのを追うように、私が着いて行く。今日だけは、いつもの道草いっぱいのゆっくりペースはやめて、まじめにピタリと着いて行こうと思っているからだ。

その日は、朝食が食べづらかったが、歩きはじめると、今までほど苦しくはなかった。私はこの7年毎年1回高所登山を続けているが、毎回、第1段階の3,000~4,000mで一番苦しむ。しかも顕化に時間がかかる。今回も出発直前の富士山頂で宿泊中吐いたのに、理塘(3,900m)でまた吐き、その上、熱柯~南達で尿量が減少し、1錠の利尿剤の助けを借りて、やっと平常の状態に戻った。しかし、いつも後半の登山活動では、尻上りに良くなってくるので助かっている。特に登山が終ってから、やたらと元気になって探検心旺盛になり、あちらこちらと自然観察に徘徊しては仲間に心配をかける。

実を言うと、このアタックの朝、私には気になることが1つあった。手、足、顔に軽いしぐれを感じていたのだ。この種の自覚症状は初体験だ。もし、ひどくなってくるようなら、下りて酸素パックを吸った方が良いなと考えながら、手足の感覚を確かめつつ登っていた。

7時になると東の空は美しく茜に染まり、7時20分太陽が昇った。ちょうど、その時、白いクレバスでできている東峰まで登って来ていた。青みを増してきた空を細く切り取って、割れ目の氷壁

が赤く染まってきた。「ワーン、美しい！」さらにそのクレバスの背を西へまわりこむと、今度は、主峰のアイスクリームのようなスノードームも、オレンジ色に輝いて、藍色の空に突き上げているではないか。クレバスの背に1人ずつ上がって来る隊員の喉から「アッ」、「オウ」という感嘆の声が溢れ出る感動の一コマである。

昨日の天気は今日ほど良くなかった。こんなすばらしい色は見られなかったと、隊長も感動している。「よかった」と私は内心安堵した。というのも、彼がベースで、自分が第2次隊にも同行するというアタック計画を発表した時から、「きっと50歳になった私を気遣ってのことだろう。私なら、一昨年も、マッキンレーをウェスト・リブから登頂しているから、まだ大丈夫。断ろうか」「いや、やっぱり、大丈夫と思っていても、年をとると、どんな思いがけない高度障害が現れるかもしれない。何かあってから、『自分が同行していればよかったのに』という後悔を飛田さんがするのも気の毒だ」と考えたり、迷いながら3日過ごしてきたからだ。

東峰を1ピッチ下りると広い雪の鞍部になっている。そこから主峰への登り口では、ツララの下がったクレバスのある雪壁が頭上に覆い被さってくる。昨日は軟雪でフィックス工作に苦労したそうだが、今日はまだ硬くて難なく通過できる。しばらく緩い雪面を登ると、もう主峰への最後の急登部が1ピッチあるだけだ。ロープはその頭頂部まで付けられている。こんなに親切なルート工作をしてもらって、その上、隊長に同行してもらうなんて、まるでお姫様の登山だなあと思しながら最後の雪壁をひと頑張り。一足先に登り切った隊長がカメラを構えて「もう一度、ピッケル振り上げて。ハイ、ポーズ」と言いながら待っていてくれた。そうやって、1人ずつ、雪庇の上に首を出したところでパチリ。背後の東の空には、遙かに四川の雄峰コンガが見えていた。一緒に写っているかな。

5人が頂上台地に揃ってから、みんなで一緒に10mほど北側へ歩いた。大きな雪庇の上だから端には寄れない。昨日立てられた赤布標識の側に立つ。9時5分。隊長が「第2次登頂隊頂上に着きました」と、BCの中国協力員に報告している時、ふと西を見ると、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリが、はっきり見えている。そうだ。いいこと思いついた。飛田隊長の足元にギャラ・ペリがくるようにして、1枚写しておこう。2年前、彼が肋骨を折りながら苦闘した山なのだ。

私はBCへ中国語で登頂の挨拶とお礼を伝えた。その交信を伊藤さんが聞いていた。彼は第1次アタック後、滝田さんとC1へ下り、今日再びC2撤収の支援に向っていた。ちょうど、一番苦しい南稜乗越にいて、足元から崩れ落ちる軟雪と闘っている時、懐に入れたトランシーバーで傍受していたそうだ。「ああ、とうとう遠藤さんも登ったか」と、喜んでくれた。飛田、伊藤、遠藤の3人は、2年越、140万円かけた格聂峰登頂なのだ。

寺沢さんは、インドやネパールの山にもう3回も行っているのに、どうしたわけか、いつも自分が登頂するチャンスがなかったという。生まれてはじめてヒマラヤの頂きに立つ喜びを、跳り上がって表現している。眼鏡の奥で涙が光っていた。

天城さんは幸運な人だ。雪宝頂について2度の中国登山で2度目の登頂だ。滝田さんと大野さんも幸せな人だ。はじめて海外に来て、もう頂上に立っているんだから。こうして7人全員登頂できた。よかったです。ほんとうによかった。

ただ残念なのは、昨年の仲間たちが、この青空の下でこのすばらしいパノラマを見られないことだ。そうして、もう1つ残念なのは、雲南省との境にある梅里雪山が、南の空に低く並ぶ雲の帯の中にあって見えないことだった。

北京に戻って、登頂証明書を貰った時、汪鉄銘先生が、「遠藤さんが、中国へ登山に来た回数が一番多い外国人です。」と教えて下さった。

「エー。そんなに来たかな。」という感じがする。ボゴダ、玉竜雪山、クラウン、格聂峰2回。合計5回のうち登頂は2回だけ。勝率2/5と、低いからだろうか。いずれも全員登頂か全員不成功かのどちらかである。

人生の花開く30代は、肝臓病のためにしばんでいたが、40歳になるころやっと、肝機能検査数値が安定してきたので、再び登りはじめた。42歳の時、折よく中国が外国人に山を開いてくれたので、未登のボゴダ峰へとびついで行ったわけだ。以来、「中国人と中国語で話したい。」と思い続けてきた夢が、この3年中国語を習って、50歳になつた今年、どうにか、言いたいことが伝えられるようになってやっと実現した思いだ。言葉ができると、中国登山の楽しみは倍になってくる。

50歳と言ってもまだ「実年」の入口に立ったばかりだから、健康管理さえすれば、高所登山も続けられる筈である。実際、最近では、まだまだ青春している人が増えてきたのは心強い。しかし反面では、脳血管障害や心臓病による突然死の例もあり、危険をかかえて登っていることを肝に命じておかねばならない。出発前と帰国後には健康診断に行き自分の体をよく知ること。アプローチから登山中は、毎朝目が覚めると、すぐ、脈拍、体温など測って、順化程度を知り、無理のない行動をする。順化していない段階では歩行スピードを遅くし、休息時間を長くとる。水分の摂取、尿量の減少に注意する。仲間に迷惑をかけないでおこうと無理をしたり、若い人に負けたくない、頑張りすぎれば、ほんとうに迷惑をかけてしまう結果になるので、少々なまけている方がかえっていいだろう。

その分、「実年の知的パワー」を發揮して、隊のお役に立たなければいけないのだが、昨年の格聂峰では、計画の段階で、登山時期の選びちがいを指摘できず、昨年の仲間に申し訳なく思っている。気象衛星「ひまわり」の雲を研究すれば、最良の登山時期を選び出せることを知っているながら、実行しなかったことは、科学者はしぐれとしてたいへん恥ずかしいことで、それを教えて下さった元京大防災教授の中島暢太郎先生には未だに挨拶に行けないでいるが、今年は、その「ひまわり」の雲による予想が当たって、6月前半に好天が続いたことと、登頂成功の朗報を持ってお訪ねしようと思っている。

# 遠征を終えて

天城 敏彦

87年の夏、課題を残したまま、格聂峰から帰ってきた飛田さんと会ったとき、88年に再度行くが一緒にどうかと誘われた。写真で見るより地形は複雑で、簡単にはいかないかもしれないが、今度こそ必ず登りたい、時期は5月下旬から6月まで、87年のメンバー3~4人を含めて6~7人としている、とのことだった。飛田隊長のもと、再びライト・エキスペディションができる。心踊る話である。急なことでもあり、さすがに即答はできなかつたが、心の中ではその場で参加を決めていた。

87年のメンバーでもあった山崎氏が思いがけないケガのため参加できなくなり、最終的にメンバーが決まったのは1月末。かなりあわただしい準備だったが、多くの方々の協力もあって比較的スムーズにこなすことができた。

私自身は、秋口に痛めた足の肉離れがなかなか治らず、3月になってようやくトレーニングができるようになり、なんとかギリギリで体調をとのえての出発となった。

好天にも恵まれ、登山は成功した。とりわけ見事だったのは、飛田さんのルートファインディングとタクティクスだった。ルートは手探りで切り開いていったのだろうが、あとで振り返ってみれば、この時期での最も合理的なルートとなっていたし、また、方針を立てる、実践する、次の事態に直面する、態勢を立て直すという、言ってみれば当たり前のことだが、小気味いいほどに決まっていった。私には職人芸を見るような思いだった。

幸いにも私も2次隊の一員として6月12日に山頂を踏むことができた。前日までの苦労がうそのように風もなく暑くも寒くもなく、茜色から純白に変わった雪面を心地よく登りつめると山頂であった。北方は雲海の上にいくつもの鋭峰がそびえ、南方、東方にはひたすら広大な高原が果てしなく広がり、遙か西方には雪をつけた一群の高峰が望めた。そしてみんなの顔がほころんでいた。

私は、今回で3度目の海外登山ということにな

ったが、もちろん初めから何度も出かけようとは思っていないかった。一度でいいからヒマラヤの地に足を踏み入れてみたいという思いからはじまり、後はあの快感をもう一度という気持ちである。しかしそれ以上に、次々と目標をもって登山に取り組んでいる人たちは多い。私はこんな自分の登山のやり方でも、しかたないと思っているのだが、とりわけ今回はそんな前向きな仲間の姿を、素直にまぶしいなと思っていた。

今回の遠征は、老若男女とバラエティーに富んでいた。そんななかで、40歳を過ぎた私でも、それなりの役割はあるだろうと思っていたし、また、若い隊員たちと競おうとはしないにせよ、同等の仕事はこなそうと思っていた。だが実際は果たしてどうだったのだろうか。新しい高度での作業はやはりきつく、BCの設営やC1の整地などでは目まいと息切れあまり役に立っていない。また、B隊のリーダーという役目を引き受けながら、あまりリーダーらしいこともできず、それが飛田さんの2次隊へのサポートという苦労につながってしまったようだ。

ベースキャンプで格聂峰を見ながら、今回、全力でいい登山をしたい、そうしたらこれで最後の海外登山としてもいい、よけいな情熱は埋めることができるなら埋めてしまったほうがいいのではないか、と自分に語りかけていた。そして実際に気持ちのいい登山をすることができた。しかし帰国した今、このことの結論はまだ出していない。



# 振り返って

寺沢 玲子

「頂上に立つって、やはり良いものだな」と飛田隊長。「何回立っても、頂上って目頭が熱くなる」と感慨深げな遠藤さん。自分自身の登頂した喜びと、「残してしまった課題」を解決した3人への祝福の想いが、ちょっとびり眼鏡を曇らせた。見渡せば紺碧の東の空にコンカ、遙かな西には玉峰ナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリが、その雄姿を見せていてる。

過去3回の遠征体験で、己の実力の程を思い知らされていた私は、正直なところ今回も最初から自分自身が頂上に立つことは考えてもいなかった。ただ、人並以上に未知の地へのあこがれを抱き続けていた私にとって、魅力のある地であったことと、私自身に、俗に言う『渉外屋』の素質が少しだけともあったらしく、誘いに乗り、そして幸運なことに初めて頂上に立つ感激を味わうことが出来た。

昨年11月、飛田隊長に誘われるままに参加表明し、その後体調のすぐれない2ヶ月の間、参加辞退の言葉が幾度かノド元まで出かかっていた。結果、頂上に縁がなくとも、いつものようにマネージメントのサポートに徹してでも己にとって参加意義のある遠征だと納得し、気がつくといつものように駆けずり回っている自分がいた。

登山活動が始まり、異常な程に快調な体調に、むしろ戸惑いを覚えた。自分の身体ではないよう調子が良すぎる……。それ故、疲労困憊して帰幕する工作隊の隊員に、交替しようと言えるだけの技術も体力もない自分が腹立たしく、みじめでもあった。せめて不要な気遣いをさせないように、と思って、常に動いてないと気の済まない飛田隊長や滝田さんは、トロい私がボケッとしている間に、素早く行動を起こしてしまう。

アタック態勢が整い、1次アタック後に飛田隊長が、2次隊の我々のサポートに入る旨を聞かされた時の複雑な想い……。果たしてそこまでして登頂していいのだろうか。しかし、その気持ちも、隊長の熱意の前にはしばんでしまう。50歳の遠藤

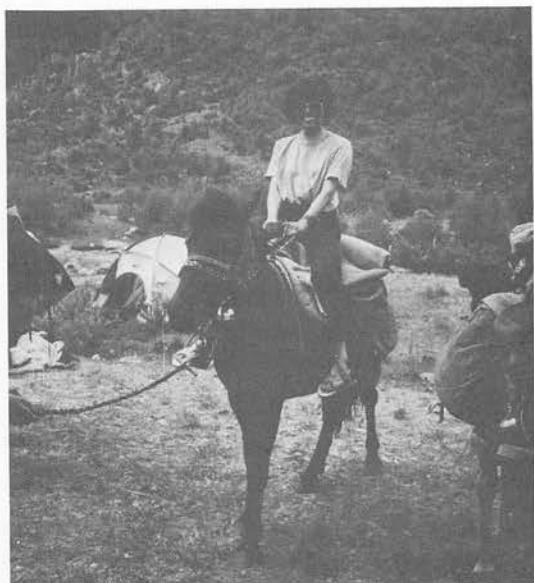
さんを何としても頂上に立たせたい、たとえ首にロープをつけてでも……。過去2回遠征を共にしている2人の関係は、端で見ているとなんとなくおもしろい。登山観も価値観も全く違います。根底のどこかでお互いを認めているのが、言葉のはしはしに窺える。それ故首にロープをつけてでも、という発言が出たのだろう。

実際、我々2次隊の様子を見ていたら、仮に私自身が隊長であっても、サポートに入ろうと思う状況であったのだから、飛田隊長が休日出勤を買って出たのも無理はない。

サポートにはサポートの喜びがある。しかし、登頂それも全員登頂の喜びは、何とも表現出来ないものがある。おどけて跳ね上がったりしてみても表現しきれない嬉しさと、ほんの少しの罪悪感が同居している。

神の山を汚したたりか、登山活動中の体調の良さとは全く裏腹に帰路の車の旅では一人では起きていられない状態となってしまった。

それでも楽しい遠征であった。登山観も価値観も違う7人が、時にはぶつかりながらもそれぞれの立場を尊重し、大人の遠征が出来た。楽しい、そしてさわやかな遠征だった。



# 初めてづくしの格聂峰遠征

滝 田 収

初めての海外登山で初登頂の成果、私にとって格聂峰遠征隊に参加できたことはまさにラッキーだったと言えます。

3年前H A Jの遠征に参加したく入会したもののが都合で駄目になり、今年こそはなんとか外へ出ようと、トレッキングを考えていました。遠征前に高所を体験し、遠征はそれからと考えておりました。その時に会の先輩にH A Jの遠征参加を促され、何処までやれるか勉強のつもりで申し込んだわけです。

初めて八ヶ岳の合宿に加わり、「ついて行けるのか」「登れるのか」そんな不安が先立ちました。まして準備会、合宿と思うように参加できず、隊長以下他隊員にまかせっきりになったことは申し

訳なく思っております。

高所での登山活動においても、ルートを伸ばす隊長、副隊長について行くのが精一杯で、自分の力不足を痛感するばかりです。約2週間の登山活動で最後まで体調を崩すことなく動けたのも、隊長が私をうまくタクトしてくれたおかげであります。ありがとうございました。

今遠征隊の準備期間から渡航、キャラバン、登山活動と、見るもの聞くものすべてが初めての私には、驚いたり、昔の自分を感じたり、新鮮であったりと、色々と勉強になりました。この貴重な体験をさらに自分のものとし、次のステップにしたいと思います。

神の山 格聂峰、ありがとう。

## 神の山 格聂峰

大野 邦晴

1988年6月12日9時5分、6,204m、生涯忘ることのできない自己最高高度に到達、2次アタック隊5名も無事頂上に立ち、全員初登頂成功となった。頂上に立った時、もう登らなくてもいいのかという気持ちが強かった。それと同時に無事BCまで戻らなくては成功とは言えないとも思った。

BC(4,350m)からして全く未知の高度だった。水場まで行くのに息切れがして、目の前に広がる大雪原をみて、果たして自分の体がどこまで耐えられるのか?自分にとってヒマラヤに来るのは早過ぎたのではないか?頂上アタック終了まで寝てもさめても常に頭の中に不安材料として残っていた。でも今、もう一度、今度は自分で隊を組みヒマラヤの峰々を闊歩してみたい。多くの人達に

ヒマラヤの素晴らしさを肌で感じとって欲しい、その為にも今回の遠征で得たすべての事柄を100%自分の血とし、肉としたい、否、しなければならない。夢が数年先に実現するか、はたまた夢のまま終わるか分からなければ、その為の努力はしていこう。

筆をおくに当たり、自分の親となり教師となり接して下さった飛田隊長はじめ、各隊員の方々に心からお礼を述べたい。また、わがままで1カ月余り仕事放棄しながらも再び温かく迎えてくれた職場の方々、ヒマラヤ遠征を応援してくれた東京心岳会の会員の人達、その他多数の人達にも厚くお礼を述べたい。そして最後に、内心心配しながらも顔では笑って送り出してくれた両親に有難うの言葉を送りたい。

## 占戈生格聂

四川省登山协会连络官：高敏

5月21日02:30分日本喜马拉雅协会格聂峰登山队顺利从北京乘飞机到达熊猫的故乡四川——成都。成都是中国西南的一个重镇，她位于富饶的川西平原中部，象是镶嵌在绿色平原上的一颗明珠，是中国一个文化名城。登山队由飞田和夫队长带队的一行7人踏上这一古城还没有休息，就进入了紧张的登山装备准备。经过一天的装备和食品准备，于5月23日就乘车颠簸在川藏线上，经过四天的艰难长途跋涉，全队10人于5月25日安全顺利到达汽车的终点——热柯。在这四天的艰难跋涉中遇到了不少困难，都得到了当地政府和人民的支持和帮助。登山队所到之处也都得到了热情的欢迎，并给予了热情的接待。在雅江的茶话会和晚餐上，大家唱起了热情奔放的康定情歌。县体委的曾小兰小姐和日本朋友一起跳起了藏族舞。以上这些都是因为日本朋友的热情和友好，更是于中日人民的友谊分不开的。

经过两天的长途步行后，来到了理塘县140km处的神山格聂峰山下，并在这格聂峰南面海拔4350米的地方安营扎寨。在大本营近处到处生长着鲜艳的野花。在远处有墨绿的森林，给这才建立的营地镶上了双重美丽的花边。

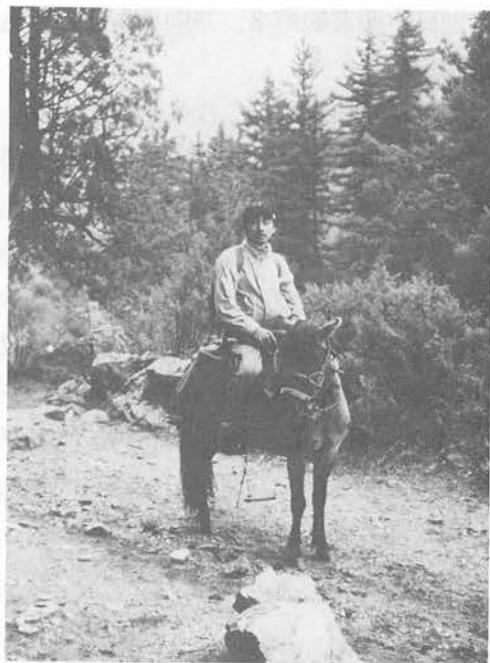
在这两天的长途山间步行中，第一天（5月28日）从热柯还没出发，就下起雨来。并且大家看见这雨水不象落在地上，也不象落在身上，到象落在了每个队员心里，天是灰的，队员们的心是沉的。在这样的天气下登山队一行10人和马工就踏上了去第一天休息的目的地——南达。在南达登山队经过一天的山区适应训练和对住地大本营的侦查，于5月30日向格聂峰南面进发了。这天格聂峰天气非常好，而且格聂峰也揭开了她处女而有神秘的面纱欢迎日本朋友的到来。并向日本朋友抱歉87年没有很好的接待他们，使他们去年没有登上顶峰。

这支登山队是第二次来到格聂峰的，也是来做87年没有做完的课题的。格聂峰她海拔只有6204米，但她是一座攀登难度很大的处女峰。还没有谁征服过她。6月1日经过一天的登山装备准备，全队七人向格聂峰出发了。11:00时登山队七人在4800米处分A、B两队，开始了对格聂峰的全面侦查。A队以飞田和夫队长为首的三名队员就开始向5000米高处发展，经过几小时的奋战，一号营地建立了，他位于5100米高。紧接雪线。第二天A队三名队员就马不停蹄，重返C1营地，并向C2营地做修路和侦查，又经过几天艰难的修路和侦查，终于6月5日在海拔5800米处建立了二号营地（C2）。

仅接着的几天，全队队员开始了物质转运。在这几天天气一直很好，给登山物质转运带来了很大的好处。6月9日通过对天气的分析飞田队长和队员们一起把登山计划拿出来了。登顶定在6月13日和14日两天。第二天早晨天还未亮以飞田队长和副队长组成的A队做

物质的最后转运出发了。并准备 10 日晚住在 C2 营地。11 日早对主峰做一次路线侦查。谁知道 11 日就成为登山队不可忘记的日期了。6月 11 日上午 10：40 分突然对讲机内传出了激动人心的消息——我们已于 10：38 分胜利登顶成功了。接着第二天 B 队就进行了第二次登顶，并顺利的在 9：05 登上了顶峰。B 队攀登队员中寺泽玲子和年大 50 岁的远藤京子是两名女将。可是她们顽强的精神，克服困难的毅力深深打动了我们的心。并给我们留下了深刻的印象。对他们俩位女性当地群众只有这样一句话——日本女性真了不起。他们是日本女性的代表。

登顶成功后的当天晚上，全队 10 人和当地群众马工一起在丰富的庆功宴上。中日朋友共同唱起了赞歌。庆祝登山胜利。顿时荒芜寂静的高山成了欢乐的天堂。日本朋友送上了一杯杯暖心的美酒，藏族同胞也献出了美味的酥油茶，跳起了藏族舞。唱起了庆祝歌。篝火越烧越大。烧吧！把格聂峰照亮，让中日友谊万古长青！欢迎再来！



## 胜利而归

翻译 包启东

日本喜马拉雅协会登山队，于1988年5月20日到达成都后，经过二天的登山器材的整理之后，于22日离开成都，一路上汽车奔驰在千里川藏线上，运往西藏的各种物资都要从这里经过。但是川藏线公路山高路险，而且气候变化无常，时而太阳高照，时而雨水如注，特别是在翻越高耸入云的二郎山时，好象老天故意和我们作怪一样，大雾笼罩了整个二郎山，十几米外看不见人，汽车行驶的很慢，简直就象爬行一样，当我们到达二郎山顶的时候，看到夜幕下的群山，显得格外的宁静，吸一口新鲜空气简直舒服极了。当晚零晨12时，我们终于到达甘孜州首府康定城。

康定是一座年轻的城市，这里集中了勤劳勇敢的藏族人民，他们世世代代在这里辛勤地劳动，养成了一种朴实淳厚的性格，他们的热情好客，给我们留下了深刻的印象。

第二天我们正好赶上了这里一年一度的转山节，藏族老乡各自穿上了节日的盛装，有的甚至从百里之外赶来，在康定的跑马山上，庆贺自己的节日，据说康定情歌就是由此而来的。日本朋友这一天显得特别活跃，他们为能赶上这个具有民族风情的节日而特别高兴，并且摄下了一个又一个珍贵的镜头。

24日我们来到甘孜州下的雅江县城，这是一个背靠高山，面对雅龙江的一个小城，街面短而窄，充其量有几百米长，但是麻雀虽小，五脏俱全。在这里我们受到了县体委的热情接待，小小的茶话会，表达了藏族人民对日本友人的热情欢迎，丰富的晚餐上中日两国朋友的一曲曲娓娓动听的歌声，说明了两国人民的友谊之情，晚餐是在欢快的藏族舞蹈中结束的。

第三天我们来到了全国海拔最高的县城之一，4200米高的理塘县，来到这里之后，中日两国朋友中，先后都有人开始了不同程度的高山反应，但相互之间关心照顾的友谊之情更增添了我们继续前进的信心。

热柯区是理塘的一个区，格聂峰就耸立在这里，格聂峰海拔6204米，终年积雪，是一座历史上未被征服的处女峰，当地人把她称为神山。

我们与日本登山队一行10人在25日到达热柯区，做了三天的短暂休息后，开始向格聂峰进军，由于登山队带了大量的登山器材和食品，由此，当地政府为登山队准备了专门用于高原地区驮货物的毛牛，并且请了几位懂汉语的马工，他们很高兴地承担了这次货物的运输任务。

为了逐渐地适应高原地区给我们带来的各种困难，我们首先在离大本营约20公里的南达扎营，这里海拔3700米，是一个山清水秀，景色迷人的地方，经常可见适合于高原气候生长的各种野生动物。这里的植物普遍长得很低，这或许是高原缺氧而造成的吧。

5月30日我们开始向海拔高达4350米的大本营进军，大本营就设在格聂峰的脚下。格聂峰展现在我们面前了，远眺山峰，冰雪覆盖，白茫茫的一片，给人一种高不可攀的感觉。登山队在大本营进行了几天的修整之后，便开始了登山前的各种侦查活动，以飞田队长为首的日方登山队，为了早日登上格聂峰，他们迎着朝霞而去，伴着晚霞而归，对各种地段做了实地考察，设立了各营地，最后通过对比分析，制定了一个最佳的、安全、可靠的登山路线。

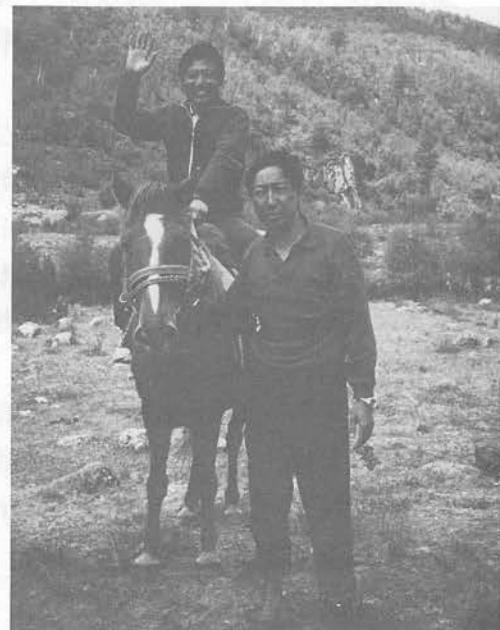
6月9日以飞田队长为首的A队，满怀信心，踏上了登峰的征途，队员是副队长伊藤、三龙田，首先他们顺利地到达了一号及二号营地，按计划他们应该12日登顶，但是他们为尽快征服格聂峰，决定提前一天突击登峰，6月11日这天，天气特别好，他们经过几各小时艰难攀登，终于在上午10时38分，胜利地登上了最高峰，当他们把这个消息，用步话机传给我们大本营的时候，我们中方人员当时的心情和他们一样激动，我们为他们顺利登上顶峰而庆贺。

6月12日以天城为领导的B队，也开始了突击顶峰的任务，队员是远藤，寺泽，大野其中远藤和寺泽是女性，她们的顽强拼搏的精神给我们的印象是很深的。为了顺利登顶，飞田队长再一次和B队上了主峰，日本登山队员团结一致勇于攀登的这种精神是值得我们学习的。

为了祝贺日本友人的登山成功，我们为他们举办了高山宴会，我们的厨师老刘为这次晚餐做了各种拿手好菜，日本朋友纷纷举杯，相互祝贺登山的胜利，他们都说，我们成功了，我们的愿望实现了。

我们胜利了。

我们终于胜利了。



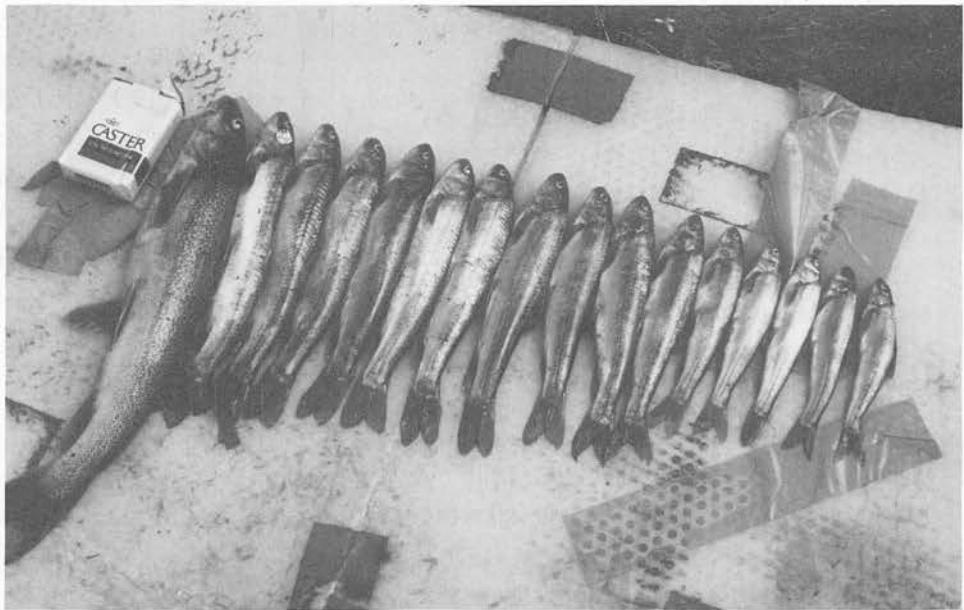
### III 担当報告、特別レポート

食　　料

装　　備

気　　象

基礎体温測定のススメ



南達を流れる清流で釣れた魚

# 食 料

寺沢 玲子

今回、食料の国内持出量を 100 kg に押さえたいとの意向から、原則として高所食は日本食、BC は現地食を主体とし、スペシャル的に日本食を用意する程度に留めた。隊員 7 名中 5 名が遠征経験者であること、初めての 2 名にしても国内での山行形態から察すると、食料に対しての順応は充分出来るであろうという目算からである。結果としては、前評判の高かった四川料理がノドを通らなかった者は 1 人もいらず、逆に全員の食欲におどろかされる羽目となった。

毎日の栄養面でのバランスが取れていないという声もあったが、短期間の登山の場合は、むしろノドを通り易い物を中心と考えた方が良いと考えての食料計画であった。味の好みを別にすると、中国の場合はインド、ネパールと異なり、アプローチでの食事がかなり良いように思われるが、いかがなものであろうか。

食料計画は、その遠征形態によって異なってくると考えるのは誤りだろうか。

以下、特徴的な点は、

- 1) ぬかよろこび（インスタントぬか漬の素）を使用し、好評であった。
- 2) 健康食品の粉末クエン酸は、酢の物、飲用に利用出来、今後も利用価値は大きい。
- 3) 切干大根、干菊類は軽く、調理方法もいろいろあるので、大いに利用したい。
- 4) 粉末コシニャクは休養日に是非おススメしたい。栄養価はゼロでも、サシミに、オデンにと日本の感触を楽しめる。10 g で 5 ~ 6 個分。
- 5) BC では、馬方の採っている山菜を教えてもらったコックが、青物不足を補ってくれた。

現地での買出しは、ほとんど成都で行ったが、あらかたの物は東風路副食品商場と紅旗商場で入手可能である。ただし油等のように液体状の物を購入する場合は、容器を持参することをお忘れなく。また、米や粉類も同様で袋類の準備が必要である。

成都並びに熱河での購入状況は下記のとおり。

1 元 = 約 35 円、1 公斤 = 500 g

米（大米）	1 公斤	0.17 元
小麦粉（面粉）	3 公斤	0.66
砂糖（糖）	4 公斤	3.60
食用油	1 公斤	0.71
春雨（粉丝）	1 公斤	1.60
塩	1 公斤	2.20
茉莉花茶	1 公斤	4.90
麦芽飲料（麦乳精）	1 公斤	4.37
片栗粉（淀粉）	1 公斤	0.95
粉ミルク（奶粉）	1 公斤	4.75
ビスケット（饼干）	1 箱	1.08
干しいたけ（干香菇）	1 公斤	21.00
兎肉（咸兔肉）	1 条	8.05
ミカン缶詰（糖桔）	1 筒	1.40
黄桃缶詰（糖桃）	1 筒	1.66
龍眼缶詰	1 筒	5.13
ライチー缶詰	1 筒	3.36
トマト缶詰（蕃茄）	1 筒	0.94
コーヒー	0.2 公斤	4.34
キュウリ（黄瓜）	1 公斤	0.20
キャベツ（洋白菜）	1 公斤	0.07
インゲン（菜豆）	1 公斤	0.60
スイカ（西瓜）	1 公斤	0.80
オレンジ（桔）	1 公斤	2.60
ビワ	1 公斤	0.85
唐ガラシ（辣椒）	1 公斤	1.00
ザーサイ（榨菜）	1 袋	0.06

# 装 備

滝 田 収

昨年に続いての計画ということで、装備においては昨年の成都デボ品を利用することができた。幕営用具、生活用具はすべてこれを利用した。日本からの持出し装備はフィックスロープ、スノーバー等の登攀用具の他若干ですみ、大型プラバール2箱、約60kgですんだ。

登山活動は連日天候に恵まれて順調に進み、予定より5日早くBCを撤収することができ、燃料、その他生活用品も十分に余裕を持てた。現地購入品はバケツ等の生活用小物で、すべてデボ品で間に合わせることができた。

以下に装備の使用状況を記し、主な装備をまとめてみた。

## 〔登攀用具〕

ルートは昨年の東南稜から南稜へと計画。BCを若干上げる予定で8mmフィックスロープを昨年と同じく1,600m準備する。BCからC1までに50m3ピッチ使用、C1からC2までに20ピッチ以上費やし、C2以上で不足をきたしてしまう。最終的にはC1下のフィックスロープを回収するとともに6mmナイロンロープを代替用として上部に備えた。9mmナイロンザイルは最後のアンザレイン用としたが使わなかった。

ロックハーケンはほとんどが雪上ルートのためあまり使わなかった。平形アイスハーケンをB～C1間で若干使用だけで他のアイスハーケン類もほとんど使わず、60cmスノーバーを常用した。

スノーバーは60cmと40cmを準備した。60cmはほぼ予定どおりの数量、40cmはテントのペグとする。

標識竿はC1直下とC2から東峰と本峰のコルの間で使用、東峰下の雪面に、雪庇、クレバスの注意箇所に有用だった。

## 〔幕営用具〕

テントはBC用と高所用を準備した。メステントとして20人用の大型テントを準備、他にBC用として4人用テント4張、夏テント(8人用)1

張を用意した。中国側は自分たちで準備しており、小型テントは4人用3張だけ使用した。これも大部分はメステントで寝起きする隊員もあり、あまり利用はされなかった。

高所用はC1に4人用ミクロテックステント2張り、C2には同じミクロテント4人用、3人用をそれぞれ1張ずつ設営した。

登山期間中は連日晴天に恵まれたこともあり、内張は全く使わなかった。マット類はBC、C1、C2ともペスマット(180×90×5mm)を使い快適に過ごせた。

## 〔燃料類、照明、バッテリー〕

BC、C1でガソリンコンロ、C2でキャンピングガスを使用、ガソリンは40ℓ程用意したがBC、C1で約20ℓほどで済んだ。計画で中国側の石油コンロ(20ℓ)を考えていなかったため、BCではおおいに助かる。結局コンロも6台準備したもののが4台ですむ。

ガス・カートリッジは成都デボ品だけですませ、使い残しを含め約20個を利用した。計画時は不足も懸念されたが、登山活動がスムースに運んだこともあり、終了時にはBCでランタンを燈することも出来た。

照明類は懐中電燈1個に各自のヘッドライト、ローソク(中10本)それにランタンである。ランタンはカートリッジ不足を考え計画では入ってなかった。バッテリーとして単1電池40本、単3200本を用意した。電池の消耗は激しくなく、また最後にはランタンも使え、使用電池は半分以下でした。

## 〔その他の〕

通信機としてトランシーバを4台準備した。BC、各パーティにそれぞれ1台ずつ使用、1台を予備にした。

酸素は登山中は使わなかったが、終了後に体調を崩した者に30分用キャンドルを2本使用した。

O<sub>2</sub> キャンドルは30分用12本、15分用10本持参したもののはすべて有効期限が切れていた。

2 ℥魔法瓶を2個用意したものの途中で2つとも壊れてしまい、1 ℥のステンレステルモス2本でまかなかったが、いつでも自由にお湯を使えるこ

とができた。

水場はBCより往復15分程、BCにプラパールとビニールシートで水槽を作り、10 ℥水ボリタンク3個を馬方に運んでもらうことができ、たいへん有用であった。

### 装 備 計 画

	品 名	規 格	数 量		品 名	規 格	数 量
登攀用具	P. P ロープ	8 mm 50 m	32	生活性用具	ホエーブス	625	6
	ナイロンザイル	9 mm 50 m	1		ガソリン		40
	ナイロンロープ	6 m 200 m	1		E P I ヘッド		6
	スノーバー	60 cm	40		ガスカートリッジ		19
		40 cm	4		ランタン		2
	ロックハーケン		30		テルモス	2.0 ℥	2
	アイスハーケン		30			1.0 ℥	2
	カラビナ		21			0.5 ℥	
	アイスピайл		3		電 池	单 1	40
幕営用具	標識竹・布		30			单 3	200
	メスティント	20人用	1		ロールペーパー		60
	エスパース	4~5人用	3		メ タ	20/箱	10
	フェースノード	4~5人用	1		ローソク	中	10
	ミクロティックス	4~5人用	3		炊事用具	一式	
	"	3人用	1		ボリタンク(ガソリン用)	2 ℥	3
	夏テント	8人用	1		( 水 用 )	2 ℥	3
	ツェルト	2~3人用	1		( " )	1 ℥	7
	ウレタンマット	180×90×5	13		水タンク	10 ℥	3
個人	ハイピーシート		3		ライター		30
	スノースコップ		2		針 金	10 m	
	スノーソー		1	その他	O <sub>2</sub> キャンドル	30分	12
	冬山装備	一式				15分	10
	生活用品				工具セット		4
					トランシーバー		3
					高 度 計		
					梱包用具	一式	

## 氣象

遠藤 京子

(気象衛生ひまわり画像より推定)

## 5月～6月の格聂山域 (30°N – 100°E) の天気 (北京時間正午)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

6月 ⑧⑧⑧・⑧⑧・⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧⑧・⑧⑧⑧

1988年登山時の天気 (北京時間正午) BC (4,350m)

5月 6月

31 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

最低温度 (°C)	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	5	4	5	0	3	2	3	4	5	0	2	3	2	5	5	3

# 基礎体温測定のススメ

寺沢 玲子

基礎体温と聞くと、たいていの人々はある種の反応を示す。顔を赤らめてイヤラシイと言う人あり、好奇心をむき出しにする人あり。確かに基礎体温という言葉には、だれしもひとつのイメージを抱いている。妊娠、出産という、女性にとって本来神聖かつ重要な役務も、近年少しずつ受け取り方が変化してきているように思う。かく言う私自身も、ひと昔前なら離縁される“子無し組”である。妊娠することを望む者にも望まない者にも、専門医は積極的に基礎体温の測定を奨励する。そのためか、基礎体温を計っていると言うと、その目的をあれこれ詮索されるが、ほんの少し視点を変えてみると、案外これが健康管理にもなるし、日常の登山計画に役立つこともある。

基礎体温をグラフに記入していくと、一定の周期を持った曲線となり、低温期と高温期の二相性を示すということは、御承知のとおりである。生理開始とともに体温は下降し、一定期間に低温期が続く。排卵日を境に、体温は急上昇し、そのまま高温期となり、次の生理が始まる直前から体温は再び下降をはじめる。もちろん健康状態や精神状態の影響は受けるものの、体温の下降と共に生理が始まるとの原則は変わらない。

詳しいメカニズムは専門の方に任せると、果たして上記の原則は高所ではどのように変化するのだろうか。原則通りに体温の下降と共に生理が始まると、というパターンをつかめたなら、もう少し積極的に活動も出来るのではないかとの期待が私にはある。もちろん女性とひとくちに言っても男性顔負けの体力の持ち主から、生理中は動くこともつらいという人まで様々である。しかし、体力のある人でも、生理中はそうでない時と比較して余計な仕事が増すわけである。かつて長尾妙子氏が、パミールの3山連続登頂を目指しながらも生理用品不足のため退却したという、残念な結果に終わったことがあった。冬期グラン・ドジョラス登頂期も生理中であったことを考えれば、せめてある程度の予測がついていたら、あるいは3山登頂も実現していたのかもしれないと思うと、本当に残念でならない。女性初のエベレスト登頂者である田部井淳子氏は、8,848mの頂上に立った時やはり生理中だったという。

確かに医学的データから見ると、生理中の女性の事故は多いらしい。自身や周囲の友人を考えてみても、なるほどと納得いくこともある。しかし、逆にだからこそ、積極的行動するためにも、己の状態を知りたいと思う。

図1は日常生活における基礎体温変化状況の一例である。若干のバラツキはあるが、通常このように、高温期と低温期に分かれる。興味深いのは、高温期は約2週間とほぼ一定しているのに、低温期は約2週間～4週間と、変動の幅が大きい。

図2、3は、遠征中の基礎体温変化状況であるが、日常生活におけるそれと比較してみると、高温期と低温期の差や排卵の有無が判読しにくい。この図から生理開始日を予測するのは難しいようであるが、實際には、先行する生理日からの期間と急激な体温の低下を目安にして、過去3回とも予測通りの生理日を迎えている。

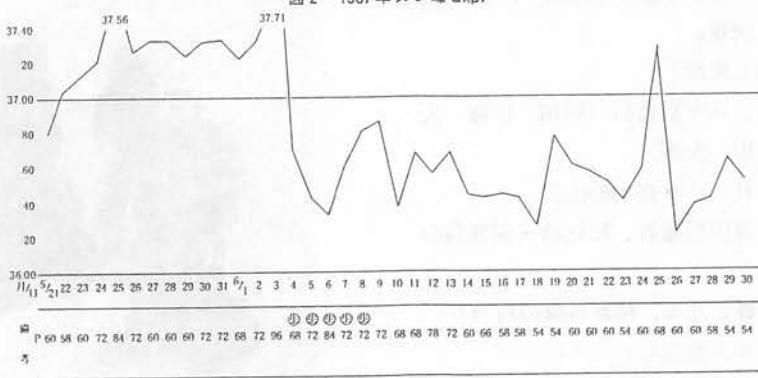
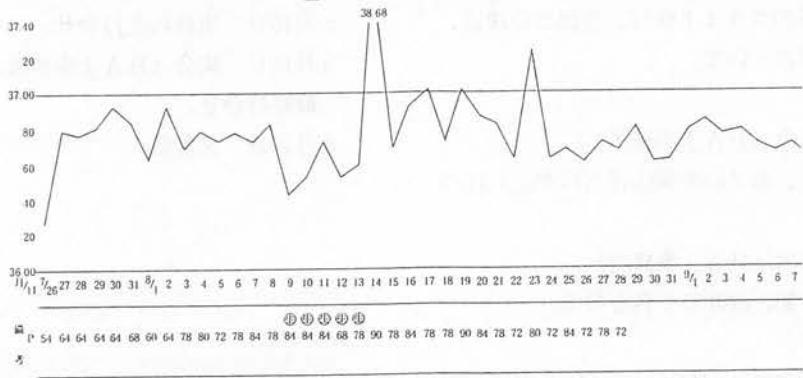
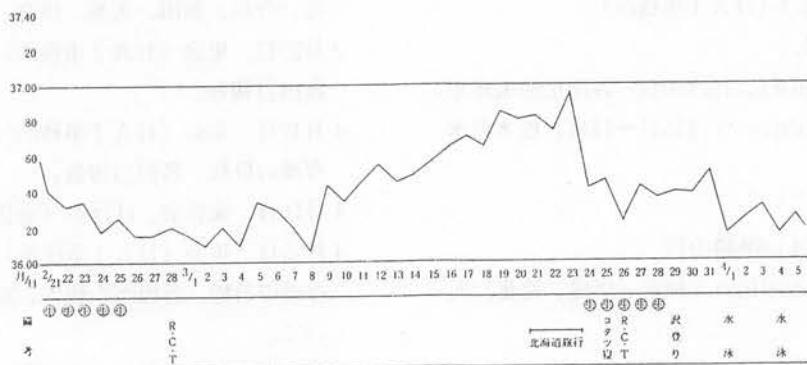
それでは、高所における生理そのものが、日常の生理と比較してどうであるのか。周期の短縮した者、延長あるいは無かった者など様々であるが、私自身の場合は、過去3回とも幾日かの延長が認められ、出血量の減少も見られた。通常国内での山行時は、岩田正道氏の説通りに出血量の増加や持続延長が見られるだけに、高度の影響によるものかどうか、興味深い。

スポーツ医学の側からの報告によると、スポーツ競技の成績が最も良いのは生理終了後であり、生理前期や初期は、成績が低下することが多いという。また、生理開始前の約4日間は、血漿の水分量が増加するという事実もあり、水分調節のバランスがくずれ、水分貯留の傾向となる。実際に、1980年ネパールの

アイランドピークで肺水腫を体験した時、まさに生理2日前であった。それ以来、留意しているが、高所に限らず国内の山行中でも生理開始前の軽いむくみは、認識され、尿量の減少を感じる。

果たして高所での基礎体温測定に意味があるのか否か、医学的な意義は、素人である私にはわからない。しかし、せっかく機会を得、高所へおもむくことが出来る間中、測定してみたい。全くの個人的興味ではあるが。

海外を目指す女性が増えているのに、高度が生理機能に及ぼす影響は、あまり耳にしない。専門家の間では話題になっているとも聞くが、実際に登山活動をしている側が無関心ではどうにもならない。過去2回の女性登山隊を体験したが、御多聞にもれず、あまり関心を示してはくれなかったようである。逆に言えば、高所を目指す人達は、己の体力に自信を持っているからかもしれない。しかし、中には私のように体力的に自信のない人もいるかもしれない。そんなアナタ、少しでも楽をしたいと思いませんか。己の身体の微妙な変化に、きっと自分自身が愛しくなります。明朝から始めてみませんか？



## 準備活動記録

1987年

11月26日 準備会（H A J事務所）

隊の構成、登山日程、登山ルート、国内合宿、今後の日程について。

隊長は1987年12月4日～88年2月上旬までパキスタン・バルトロ氷河へ。

12月10日 集会（H A J事務所）

当初の日程、

第1回準備山行、12月20日、谷川岳西黒尾根、

第2回準備山行、1月15日～17日、松木沢氷瀑訓練。

隊の方針等。

12月20日 第1回準備山行

西黒尾根→谷川岳→天神平（伊藤、遠藤、天城、寺沢）。

12月23日 集会（H A J事務所）

'87年格闘隊のスライド映写、各担当の決定、第2回合宿について。

1988年

1月12日 集会（H A J事務所）

各担当報告、第2回準備山行（八ヶ岳）について。

1月28日 集会（H A J事務所）

隊員2名参加、合計で7名となる。

各担当報告。

第2回準備山行、2月6日～7日、八ヶ岳、阿弥陀岳南稜に決定。

（隊長が帰国し出席）

2月6日～7日 八ヶ岳合宿（飛田、伊藤、天城、寺沢、滝田、大野）。

2月7日 打合せ、八ヶ岳小松山荘。

今後の日程、各担当報告、壮行会・家族会の日程、その他。

2月27日 新青峰、リモ、格闘各隊の打合せ。

2月27日 集会（天城宅）

登山タクティックス、各担当報告、今後の日

程について。

2月28日 スノーパー作製（近喰氏工場）。

3月6日 国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された高所順応研究会（東京都山岳連盟主催）に参加。

3月12日 新青峰梱包手伝い。

3月13日 打合せ。

3月20日～21日 八ヶ岳にてG II隊との合同山行（今村、熊田、天城、伊藤、安部、大野）。

3月23日 集会（H A J事務所）  
各担当報告。

4月12日 集会（H A J事務所）  
今後の日程、各担当報告。

4月16日 家族会、壮行会（池袋、東方会館）

4月25日 集会（H A J事務所）  
今後の日程、各担当の報告、富士山合宿について。

5月6日～7日 梱包（天城宅）

5月10日 事務局と打合せ。

5月16日 集会（H A J事務所）  
最終打合せ。

5月19日 夕食会。



準備山行。風雪の阿弥陀岳

## 御協力者名簿

大変お世話になりました。

厚く御礼申し上げます。

隊員一同

アルテリア㈱  
アルファ食品㈱  
I C I 石井スポーツ  
武田薬品  
明星食品  
雪印乳業  
天城素子  
稻田定重  
江尻健二  
遠藤 登  
大金信夫  
尾形好雄  
小沢隆明  
小原 博  
貝塚珠樹  
近喰 司  
坂上利明  
柴崎裕代  
清水 修  
住本芳克  
田辺 治  
出口 當  
飛田真樹  
中岡 久  
永尾剛士  
南指原さゆり  
橋本康弘  
長谷川喜久男  
林 清剛  
林尻 悟  
原田達也  
福山 佶  
星野 貢  
松館正義  
宮崎久夫  
森山安次  
安田素彦  
山崎賢二郎  
山森欣一



## 編集後記

88年の格聂峰遠征は、好天にも恵まれ、全員登頂という成果をもって終わることができました。前年に引き続いて参加した隊員は、「この晴天の格聂を昨年の隊員に見せてあげたい」と言っていました。

同じような情熱をもち、同じような苦労をして格聂を目ざしながら、悪天のためついに山頂を見ることすらできずに撤退せざるをえなかった87年の隊員の方々に対して、88年だけ参加していい思いをしてきた私などは、少々後ろめたいものを感じてしまいますが、今回の成功も前年の苦労があったからこそと思っております。

遠征は報告書の発行をもって終わるといわれます。余勢を駆ってもっと早期に出さねばならなかつたこの報告書をこれまであたためていたのは、ただ単に担当の私がなまけていたためです。この場を借りておわびいたします。

最後に、この遠征の準備を進めて下さったH A J事務局の方々、87年の隊員の方々、四川省登山協会をはじめとして、御協力いただいた多くの中国の方々、そしてさまざまな形で遠征をささえて下さった方々に改めて御礼申し上げます。

(天城)

---

### 神の山

#### 格聂峰（1988年初登頂の記録）

発行 1989年6月12日

発行人 H A J格聂(ゲニ)峰遠征隊1988

編集人 天城 敏彦

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

03-367-8521

---







